

# ミノス後期Ⅱ期の問題

——所謂ミノス後期ⅠB期の土器の再検討から——

土 居 通 正

## 1 序

1900年に開始したクレタ島の Knossos 宮殿の発掘に基づき、A. Evans は、クレタ島の青銅器時代を三時期に大きく区別し、ミノス後期 (Late Minoan, LM と略す) と呼んだその最後の時期を土器型式により更に細分した。ミノス後期に Evans により設定された、LM I A, LM I B, LM II, LM III の各時期は、現在も広く使用されている。

さて、ミノス後期のエーゲ海域の考古学上の重要な問題として、所謂ミノス文明の崩壊に関する問題があり、その年代と原因について古くから様々に論じられてきた。Evans によれば、LM II 期に地震により崩壊したとされる Knossos 宮殿を除き (Evans 1935, 942ff), クレタ島東部及び中部の各地の宮殿その他の建造物は LM I B 期に破壊を受け、軍事的色彩の強い Knossos の新王朝の勢力による攻撃がその原因とされる (Evans 1935, 885)。その後、ギリシア本土勢力による侵略説が出され、又、テラ島の噴火にその原因を求める自然災害説も出され、これを巡っては、これに賛成、或いは反対する多くの議論が交されている (馬場, 1976; Thera Congress I, II 参照)。自然災害説を巡る議論を見ると、これについていずれの立場をとるにしても、クレタ島の諸遺跡の崩壊の年代に関しては、Evans 同様 LM I B 期説が採られており、LM I B 期にテラ島の噴火が起ったものか否かが議論の中心となっている。しかし一方では、クレタ島東部及び中部の諸遺跡の崩壊と Knossos 宮殿の崩壊を同時期とする議論も、古くは J. D. S. Pendlebury 以来今日迄行なわれており、これら一連の崩壊の年代と原因を考える上で、より基本的な編年上の問題が存在することを忘れることは出来ない。即ち、この議論では、Evans によって設定された LM II 期の、クレタ島全域に及ぶミノス後期の編年上の一時期としての有効性が否定されているのである。小論は、この問題を、主に LM II 期の LM I B 期との関係に焦点を絞り、土器の文様の検討を通じて改めて考えようとするものである<sup>2)</sup>。

## 2 LM II 期問題の研究史概略

まず、Evans による LM II 期の設定について見ることから始めたい。Evans は1905年にアテネで開催された考古学会議でクレタ島の青銅器時代の編年体系を初めて発表し、翌年に出版されたそ

の要旨では LM II 期はパレス・スタイルと呼ばれた一群の土器で代表されている (Evans 1906, 10)。

彼のパレス・スタイルの概念は器形的にも文様のにも厳密に規定されたものではないが、しかし、パレス・スタイルと呼ばれた大部分の土器は、三把手付きの、器高が 70cm 弱から 80cm 程の文様を持つ大形の壺である。把手は肩部周囲にほぼ等間隔に付けられるが、各々の下に更に、二〜三個の把手が縦に付けられることもある。器表面に構成的に配された文様は様式化しており、LM I B 期の代表的土器として知られる、マリン・スタイルと呼ばれる土器に見られる自然主義的と評される様な文様と比べ、一見して相違が認められるものである。

Evans は LM II 期の土器として他に、左右各一個の把手を持ち、低い脚付きの杯を挙げている。同様の杯はギリシア本土では 1915 年の Korakou の発掘で知られており、発掘者の Blegen により「エピュラ式 (Ephyraean) 杯」と名付けられたこの杯は、Blegen によるギリシア本土の青銅器時代の編年体系で LM II 期と平行する LH (Late Helladic) II 期を代表するものとされた (Blegen 1921, 54ff)。ギリシア本土出土のエピュラ式杯と 1920 年になって知られた Knossos 宮殿南正面出土の杯は、器形の点の他に、各一個の文様が杯の器面両側中央に大きく描かれる文様配置の点でも比べられ (Wace 1956, 123-7 参照)、現在は Knossos 出土例にもエピュラ式杯の名称が用いられている。

Evans は、LM II 期に属する土器の僅少なことの理由を説明して、LM II 期の Knossos 宮殿では金属製容器が用いられていたとするが (Evans 1935, 353)、Evans によってこの時期にあてられる土器は、事実上パレス・スタイルとエピュラ式杯だけである。そしてこれらの土器がクレタ島の Knossos 以外の遺跡からは殆んど出土せず、又、逆に Knossos に於いては LM I B 期の土器の良好な推積が発見されなかったことから、LM II 期の編年上の有効性が疑問視されたのである。次に、この問題に関する議論を簡単に振り返ってみたい。

先ず、Evans 自身によって、LM I B 期と LM II 期が一部平行することが認められている。即ち、Evans は 1935 年出版の「ミノスの宮殿」第 4 巻で、LM I B 期の土器に見られる巻貝文がパレス・スタイルの土器に描かれる例があることから、Knossos のパレス・スタイルは、LM I B 期がその盛時にあった時に既に形成されていたと推察されねばならない (Evans 1935, 322) として、LM II 期を LM II A 期と LM II B 期に区分し、LM I B 期と LM II A の期の平行を認めたのである。その 4 年後、「クレタ島の考古学」に於いて、Pendlebury は、LM I B 期から LM II A 期への、或いは LM II 期内に於ける、文様の如何なる発展も識別することは不可能であり (Pendlebury 1939, 208)、又、LM II 期の土器が、Pseira, Palaikastro, Gournia, その他のクレタ島東部の LM I 期の堆積中に見られるとし (同上, 180)、LM I B 期の後半と LM II 期との同時期平行を主張した。従って、Pendlebury によれば、クレタ島東部に於ける諸遺跡の崩壊と、Evans が地震によるとした Knossos 宮殿の“最終的”崩壊<sup>3)</sup>とは同時期に起ったのであり、ギリシア本土勢力の侵略がその原因と考えられたのである (同上, 229)。しかし、この説に対して Furumark

は、それ迄、LM I A, LM I B, LM II の各時期に分類されていた土器の検討から、Palaikastro の発掘者 Bosanquet の言う LM II 期の土器は LM I B 期のものであるとし (Furumark 1941a, 151, n. 6), 又、Pendlebury が挙げた LM I 期の堆積中の LM II 期の土器は、LM I B 期に位置づけられるものであるとした (Furumark 1950, 255, n. 6)。Furumark は Evans の設定した LM III 期を LM III A:1, LM III A:2, LM III B:1, LM III B:2 に細分したが (Furumark 1941b, 103ff.), Furumark によれば、LM III A 期の土器は LM II B 期の土器を基礎に出現したものであり、LM I B 期が LM III 期初頭迄存続したことは全く不可能である (Furumark 1950, 255)。又、Gournia, Pseira, Mochlos, Palaikastro, Hagia Triada, Phaestos, Zakros の崩壊は LM I B 期末とされ、その原因については Evans 説と同様の考えが示された (Furumark 1941b, 81, 82; 1950, 255, 256)<sup>4)</sup>。Furumark はミノス後期の各時期に絶対年代を与えているが、LM I B 期が前1500年—前1450年とされるのに対し、LM II 期は前1450年—前1425年とされ、ほぼ四半世紀という短期間とされている点に、ここで改めて注意しておきたい (Furumark 1941b, 110-3)。

Furumark は以上見た様にクレタ島全域について LM II 期の有効性を主張したが、Furumark 以後も D. Levi により、LM I B 期と LM II 期の同時期平行説が出され (Levi 1959, 255; 同じく AS Atene 45-46[未見], 124-32参照), 又、E. Vermeule からも、LM I A 期の土器の植物文等の文様は、LM III A:1 期の土器に見られるものとの判別が困難であり、マリン・スタイルの土器或いは LM I A 期及び LM II 期の土器が、LM III A:1 期の土器と共存して出土するとして、LM I A 期が LM III A:1 期と一部平行するという説が出された (Vermeule 1963, 196, 198, n. 9; 1964, 145, 340)。Vermeule によれば LM III A:1 期の土器型式は LM II 期, LM I B 期, LM I A 後半の各々の土器型式に基づくものであり、マリン・スタイルとパレス・スタイルの土器は、Knossos に到来したギリシア人にとっての LM I A 期後半の贅沢品と考えられ、従来の LM I B 期, LM II 期は認められない。従って LM I B 期の Mallia, Phaestos の崩壊は存在せず、両者は Knossos と同じく LM III A 期に崩壊したとされるのである (Vermeule 1963; 1964, 特に 146-7)。この様に、LM II 期を認めない立場 (Matz 1973, 569; Hutcninson 1962[未見], 130ff. 参照) からは、Knossos を例外とする LM I B 期に於けるクレタ島諸遺跡の崩壊は認められず、Knossos を含めてクレタ島全域で大規模な崩壊が起る迄、既に侵入していたギリシア本土の勢力はクレタ島の勢力と平和裡に共存したとする説が主張されたのである。これに対し、Knossos 宮殿の“最終的”崩壊時の堆積の研究により、これが LM III A:2 期にかかっていることを主張した M. Popham は、このような“整然とした”仮説は Furumark の研究と、それ以後の考古学上の発見により、もはや受け入れ難いとした。即ち彼によれば、Knossos (Royal Road 北側) の発掘で発見された、他地域の LM I B 期の土器と密接な関係を示す“LM I B 期”の堆積と、Mallia, Phaestos, Chania 等 Knossos から遠隔地に於ける良好な“LM II 期”の土器の堆積は、LM II 期の編年上の有効性を示すものと考えられるのである (Popham 1975)。しかし、この Popham の主張も、その LM II 期と LM III A:1 期の土器の分類規準の不明な点が指摘されており (Niemeyer 1975, 212-4), 今

日なおこの問題の解決はついていないと言えよう (Popham 1980, 166; Watrous 1981 参照)。

Evans による設定以来, Furumark が, そして Popham が主張する様な LM II 期の編年上の有効性に就いては以上見た様に必ずしも明確ではないのであり, これを主張する側も LM II 期の土器型式の内容を, その前後する時期の土器型式との関係に於いて充分明らかにしていないと言える。このことは最近の Knossos の発掘で出土した海棲生物文が描かれたエピュラ式杯 (図版 6-4) を LM II 期とするか LM I B 期とするかで意見が分かれていることにも伺えるのである。

先に述べた様に, 小論では LM II 期の土器型式の内容について LM I B 期の土器型式との関係から主に検討するが, 検討にあたっては, 描かれた文様のうち詳細な分析が可能な海棲生物文 (特に蛸文) とこれに併う文様を中心に検討を進め, 最後にクレタ島の諸遺跡の崩壊に関する議論に若干の考察を加えたい。

### 3 「LM I B 期後半」の土器型式について

本論に入る前に, 近年 LM I B 期“後半”に位置づけられている, 交互様式 (Alternating Style) と呼ばれるものと, 吸盤の表現その他に退化が認められる, C 型と呼ばれる海棲生物文について見ておくことにする。

#### 〈交互様式〉

名称の示す通り, 異なる文様が交互に器表面に描かれるものであるが (図14参照), この様式を初めてまとめた J. N. Coldstream によれば, 相互に内容的に無関係の文様が厳密に交互性を守って並べられるものと規定されている (Coldstream & Huxley 1972, 302-3)。最も出土例の多いのは Coldstream らが発掘したキュテラ島の Kastri 遺跡であり, 次いで, クレタ島では Knossos と Chania, ケオス島の Haghia Irini, メロス島の Phylakopi, ギリシア本土では Laconia 地方の Nichoria から各々比較的多く出土している (Coldstream 1978, 399, fig.10 参照)。

キュテラ島の Kastri 遺跡には, 日常に使用された土器, 葬制, その他からクレタ島人の交易上の拠点の存在が考えられたが (Coldstream 1978, 390), これが廃棄される以前の層序を持つ堆積が発見されている。交互様式の土器は, その最も新しい堆積 ( $\mu$ ,  $\nu$ ,  $\xi$ ) から出土し, これらの堆積より古い堆積 (クレタ島から搬入された LM I B 期の土器片を含む) からは出土していない。

交互様式を LM I B 期後半に位置づけた Coldstream によれば, まず, 交互様式の土器 (或いはこれらと同じく  $\mu$ ,  $\nu$ ,  $\xi$  の堆積から出土したクレタ島からの搬入品と考えられる土器) の文様が, 様式化の程度で マリン・スタイルと LM II 期の土器との中間と考えられることがその論拠とされる。そして LH II B (=LM II B) 期を代表するエピュラ式杯, 或いは LM II 期初頭の幾つかの土器は, 交互様式に触発されて出現したと考えられたのである。しかし, Coldstream は交互様式の文様個々についてその中間性を具体的に論じている訳ではなく, 何をもって LM II 期とするかの問題についても, 彼の見解は明らかにされていない (先述した様に LM II 期と LM III A 期の土器の区別についての議論がある。Niemeyer 1975)。Coldstream はこれらの堆積に見ら

れる「中間的」な文様として、図1—bの文様を例示している。これは確かに、マリン・スタイルに見られる図1—aに示された文様と、図1—cに示された三把手付壺 (Evans 1935, 308, fig. 242.) に様式化した蛸文と共存する文様との中間的なものと見ることが出来るものである。しかし、

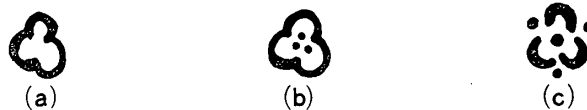


図1 三葉形岩(気泡)文の変遷

- (a) Luce, 1969, 32.
- (b) Coldstream, 1978, 397, fig. 8.
- (c) Evans, 1935, 308, fig. 242; *ibid.*, fig. 297a.

三把手付壺は LM III A:1 期迄存続したことは明らかで、この壺に描かれた蛸文を LM II とするか LM III A:1 とするかについては十分な議論はなされていない。又、図1—cの文様は別の土器 (Evans 1935, 354, fig. 297, a<sub>1</sub>, a<sub>2</sub>.) に、普通 LM III A:1 期とされる文様と共存しているのである。

交互様式の土器を LM I B期後半とする別の論拠として Coldstream は、 $\mu$ ,  $\nu$ ,  $\xi$  の堆積出土のミュケナイ式土器は全て Furumark により LH II A (=LM I B, LM II A) 期に位置づけられるのであり、LH II B期のものは含まれていないことを挙げている。しかしこの点についても、その後のケオス島の Hagia Irini の発掘では Kastri 出土の交互様式の土器と全く同じといって良

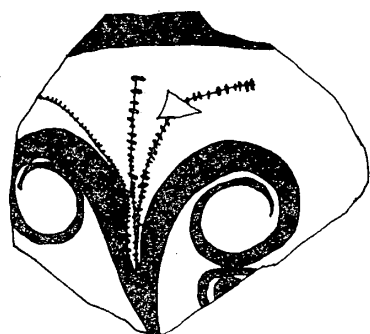


図2 エピュラ式杯 Hagia Irini 出土 (Caskey, 1972, Pl. 95-H12)

い土器と、Furumark の分類で LH II B (=LM II B) に位置づけられると考えられる百合文或いはカイダコ文<sup>9)</sup>が描かれた典型的なエピュラ式杯(図2)が同じ崩壊層から出土している(交互様式の土器を LM I B期後半に位置づける立場からは、この為、エピュラ式杯の出現の年代を LM I B期迄引き上げる説が出されている; Mountjoy 1974, 179)。この様に Coldstream の議論は充分納得のいく論拠を持つものとは言えないのである。

#### <C型海棲生物文>

LM I B期を代表するマリン・スタイルを研究した Mountjoy は、吸盤を持った海棲生物文を吸盤の形により分類し、内側に点が入られた吸盤を持つものをA型、内側に点が入られない吸盤を持つものをB型、小突起、或いは列点による吸盤を持つもの、及び、全く吸盤を失なったものをC型(図3)とした(Mountjoy 1973, 177)。C型については、吸盤の形だけではなく全体の形が小さいことも、その特徴とされ、更にその周囲の空間がしばしば空白のまま残される点もC型に特徴的とされた。マリン・スタイルとパレス・スタイル或いはエピュラ式杯を描かれた海棲生物文周囲の空間表現について比較すれば、副次的文様減少化の一般的傾向は確かに見られるが、Mountjoy は更に、キュテラ島の Kastri 遺跡の  $\mu$ ,  $\nu$ ,  $\xi$  の各堆積中にはC型海棲生物文のみが認められ、又、C型が交互様式の文様として用いられる例があることを論拠として、小形化したC型海棲生物文はA型、B型の海棲生物文より遅れて描かれ始め、これらと一時期並存した後、LM I B期終末

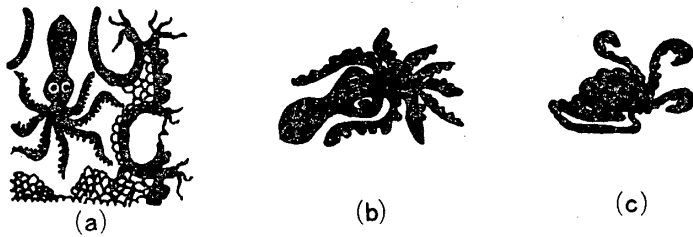


図3 C型海棲生物文

- (a) Popham, 1967, 340, fig. 2-1. (b) Mountjoy, 1974, Pl. 26a.  
 (c) *ibid.*, 178, fig. 2-3.

末に位置づけている。しかし、ここでこれらの議論の論拠とされた点を検討すれば、まず、「中間的な様式化の程度」については、ここでも具体的に論じられている訳ではなく、C型の各部の形態をマリノ・スタイルとパレス・スタイル或いはエピュラ式杯に見られる海棲生物文の形態と比較検討しても、この様に小形の文様に両者の中間に位置づけ得る様な特徴的形態を指摘することは不可能と思われる（C型海棲生物文の吸盤の表現も、LM II期の海棲生物文に見られるものと同様の退化が認められると言った方が適切であり、中間的とは言えないであろう）。次に、C型海棲生物文周囲の副次的文様が描かれない空間については、交互様式の画面に同様な空間が見られたとしても、前述の様に交互様式の年代自体に問題があり、又、LM I B期終末とするか LM II期とするかで意見の分かれる、先述の海棲生物文が描かれたエピュラ式杯には副次的文様が少なからず描かれている。Mountjoyの言う様にこれがLM I B期末に位置づけられるとすれば、LM II期直前には、副次的文様は描かれなくなったことを論拠とするMountjoyの議論は自らその説得力を減じていることになる。

以上の検討から、A型とB型の海棲生物文とLM II期の海棲生物文との編年上の中間的な位置をC型に与える論拠は必ずしも明確ではないことが理解されるのであり、EvansとFurumarkによってLM II期とされた海棲生物文の成立について、A型及びB型海棲生物文の検討を通して改めて考えてみる必要がある様に思われる。そこで本論ではまずA型及びB型の蛸文が描かれたマリノ・スタイルの土器の型式的検討から始め、蛸文自体については、その形態の主要な要素である足の形態を、周囲の空間については、空間処理の方法と各々の副次的文様の便化の程度を重視し、これらについて詳細に見ていくことにする。

A型及びB型の良好な資料は主にクレタ島東部から出土しており、LM II期の資料はKnossos出土のものである為、両者を比較する際には、地域性の問題が入る余地が考えられるかも知れない。しかし、Bosanquetを始め、Evans, Furumark, そしてPophamは、クレタ島東部出土のマリノ・スタイルの土器をクレタ島東部産の土器と区別し、これらをKnossosからの搬入品とする説をとっている（Popham, 1970, 216, n. 10, 11）。又、クレタ島出土のマリノ・スタイルを破片を含めて数え上げたMountjoyによる最近の研究では全278点中、Knossosからは158点が数えられている（Mountjoy, 1978, 154）。そこで以下でも、Pophamらの説に従い、この問題は一応無視出

来るものとしておく。

#### 4 マリン・スタイルの型式的検討 i 一 蛸 文

始めに、マリン・スタイルの画面を構成する個々の文様について触れておきたい。文様は、海棲生物文とその周囲に描かれる副次的文様に分けられるが、画面の主たるモチーフとなる海棲生物には、蛸、カイダコ、巻貝、魚、海豚、等が挙げられる。これらの海棲生物文周囲の空間は、不定形の岩文 (rock-work) や三葉形岩文 (trefoil rock-work), 或いは四葉形岩文 (quatrefoil rock-work) と呼ばれる定形的な岩文で埋められ、それらには普通大小の海草 (spray frond, sea weed) が付着している。海棲生物文周囲の空間に描かれる他に、岩文はしばしば画面の上下を区切る線 (或いは帯) に付けて描かれている。その他、star fish と呼ばれる星形の文様が巻貝文と組合わさされて描かれ、又、「雲丹」を表わすと思われる文様や「気泡」を表わすと思われる小円、半円、U字形、小形の三葉形の文様がある。ここでは、これらを各々、星形文、雲丹文、気泡文と呼んでおく。空間をパッチ状に埋める上記の副次的文様の他、充填文的性格の強い文様が空間を埋める例もある。その代表的な例は、一連の微小な半円が積み重ねられた文様である (通常の岩文と共にパッチ状の文様として描かれる例もある)。同じ方法により、通常の岩文の内側が充填されることがあり、この文様は恐らく岩の表現の一つだろうと思われる。Mountjoy はこれを岩文と呼んでいる (Mountjoy 1972, 127) が、ここでは便宜上、泡状文と呼んでおく。同様な性格の文様として、円頂部が僅かに突出した一連の半円が積み重ねられた文様があり、同じく岩の表現だろうがこれについては、網状文と呼んでおきたい。

以下で詳しく検討する蛸文は、胴体とその両側に広がる足とから構成されている。胴体はくびれて、二部分に分かれるが、目玉が描かれ足が伸びる部分を頭部、他を胴部と呼ぶことにしたい。胴体両側の足は、頭部から伸びる位置で胴部に近い方から各々、第1～第4と呼び、胴体の左右 (或いは上下) の足を特に区別しない場合は、その番号で、各々対応する両側の足を指すことにする (図4参照)。

##### <A型蛸文>

A型の蛸文を、Evans と Furumark により LM Ⅱ期とされた蛸文と比較すると、後者には、前者に普通に見られる足の交差が全く見られない。A型の蛸文にも足の交差が明瞭に識別されるものとそうでないものがあり、交差部位にも相違が認められる。A型の蛸文の変遷を考える場合、蛸文の便化を良く示すと考えられる足の交差部が特に重

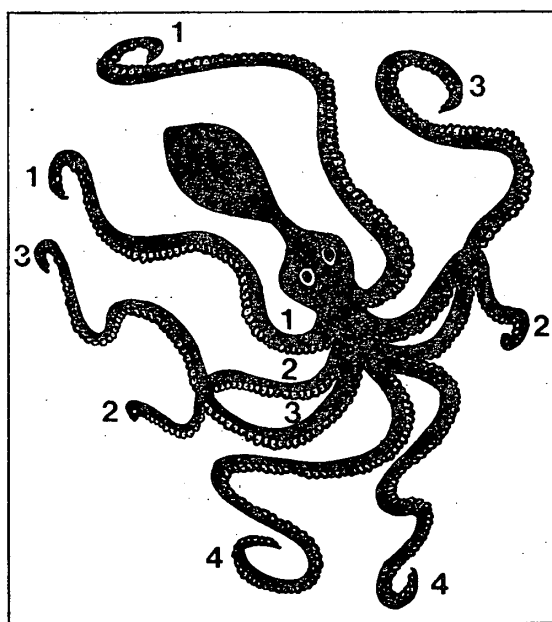


図4 蛸文の足の呼称

視されよう。以下では、先ず、胴体が斜めに描かれたA型の蛸文4例について、この点を中心に検討する。

Palaikastro 出土フラスコ形土器例（図版1—1）。

目の位置を円形の画面のほぼ中心に、頭部を斜左下に向けて描かれている。波打って伸びる足は、第2と第3の足の各々の最初の波の山頂部で交差する。胴体左側第3の足は交差後、胴体外側に向かうが、再び強く屈曲して内側に向かい、先端部は、左側第1の足と接触して両足間の空間を閉じつつ円弧を描く。第1の足は、各々外側に向かっていたものが再び内側に向かい、胴部先端より少し先で接近し、胴部上方の空間を閉じつつ互いに逆向きに外向きの円弧を描く。胴体右側では胴体左側と反対に、第1の足が強く屈曲し、第3の足は緩く波打つ。胴体両側の足のこの様な非対称的な動きに、画面に動感を与えようとする画工の工夫が認められるかも知れない。

Gournia 出土鏡壺例（図版1—2）。

最大径部よりやや下に頭部を置き、頭部を斜左下に向けて描かれている。足は、第2の足の最初の波の山頂部で第3の足が交差するが、Palaikastro 出土フラスコ形土器例に見られる様な、交差前の第2と第3の足の間に開けられた空間は見られず、両足は交差する迄接っており、第2と第3の足の最初の波の山頂部は重ならない。交差後の胴体左側第3の足と第1の足の動きを、各々Palaikastro 出土フラスコ形土器の蛸文の同じ部分と比べると、第3の足は、屈曲がやや弱く、第1の足と接触しない点で、又、第1の両足は、外側から内側に向かう足の屈曲が弱く、両足の接近する位置は胴部先端からより離れており、接近した両足の間には、なお広い隙間が残されている点で異なっている。この為、各足が区切る空間の形は、Palaikastro 出土フラスコ形土器に見られる同じ部分と比べやや弛い形となっている。

Zakros 宮殿祠堂出土鏡壺例（図版1—3）。

ほぼ最大径位置に頭部を置き、頭部を斜右下に向けて描かれている。足は、胴体右側では、第2と第3の足が交差している。しかし、両足共、最初の波の手前で交差する為、両足間に空間は開かず、交差は不明瞭になっている。胴体左側では、第2と第3の足は交差せず、第2の足の最初の波の山頂部手前で第1の足の最初の波の山頂部が交差し、交差前の両足間に空間が開けられている。胴部上方の空間を区切る胴体左側第2の足は、それ自体は、Gournia 出土の鏡壺にも見られる一方向に大きく波打って伸びる単純な動きを示すにすぎない。しかし、この足の先端部に胴体右側第1の足が胴体の中心軸を超して接近する結果、胴部上方の空間は結果的に特異な形に区切られている。この蛸文の形態は前述の二例の蛸文とは異なっているが、左側第1と第2の足の動きは前述二例の第2と第3の足の動きと基本的に同じと言える。この蛸文は、恰も、胴体左側第1の足を描き忘れた画工が、前述の二例に見られた足の描き方の原則に基づいて、これに辻褃を合わせた結果の様に見える。この見方が正しければ、この蛸文の形態に、前述の二例に比べて全般的な退化を認めることは出来ないだろう。

Palaikastro 出土鏡壺（NP34）例（図版2—1）。



最大径位置よりやや下に頭部を置き、頭部を斜右下に向けて描かれている。胴体右側では、足は全く交差せず、胴体左側では、第1の足の波の2番目の山と谷の間で、これと並行して伸びていた第2の足が強く屈曲して交差する。交差後、第2の足は胴部先端手前で円弧を描く。胴体左側第1の足は前述の三例の蛸文の様に2番目の波の山で途切れず、更に緩く波打って、器表面を二分する把手下迄伸びている。胴体右側第1の足も、胴部上方で左側第1の足と接近した後、これとの間に狭い空間を開けつつ、緩く波打ちながら把手下迄伸び、外向きに円弧を描く。第1の両足が作るこの空間、或いは、胴体左側の第1、第2、第3の互いに並行して伸びる足の作る細長い空間は、前述の三例の蛸文に見られない特徴的な空間と言える。並行して伸びる足と、それによって作られる足と足の間の細長い空間、或いは、強く屈曲する足（特に把手側蛸文の胴体右側第2の足）は、Evans と Furumark によって LM Ⅱ期とされた蛸文を持つ土器に普通に見られるものである。この蛸文には、以上見た様に、前述の三例の蛸文と異なる形態の特徴が指摘出来るが、中でも最も重要と思われる点は、胴体両側に於いて、第2と第3の足の交差が、或いはそれに近い形の交差さえ、全く見られないことである。前述の Zakros 出土鍔壺の蛸文に見られる胴体右側の第2と第3の足の不明瞭な交差を念頭に置けば、交差する足の描き方が次第に忘れられ、遂に第2と第3の交差する足が取り違えられた結果、この例の様な足の形態が出現したと解釈することも可能だろう。もしもそうであるならば、この蛸文は、前述の三例の蛸文よりも新しいものと考えることが出来よう。

以上、描かれた画面の形が類似しているA型の蛸文について検討したが、更に幾つかのA型の蛸文を見ておきたい。まず、三把手付壺に描かれた二例、Knossos 宮殿南正面<sup>6)</sup>出土例(図版1—4)と、前述の Zakros 出土鍔壺と同地点から出土した例(図4)については、前者は頭部を下に縦向きに描かれ、後者は頭部を斜右下に向けて描かれている点に違いはあるが、両者共、第2の足の最初の波の山頂部で第3の足が交差し、交差前の両足の間には空間が開けられている。足とそれが区切る空間の形態は、前述の Gournia 出土の鍔壺に見られるものと最も良く比較出来る(Knossos 宮殿南正面出土例については、三把手付壺の大画面が良く計算された蛸文の配置の点で、若干様式化されているとも言え、僅かに新しいと考えて良いかも知れない)。Popham は、この Zakros 出土例を LM I B期としたが、Knossos 出土例については、蛸文が縦向きであり、足が十分に絡み合っていない<sup>7)</sup>(no longer fully intertwine) ことから LM Ⅱ期初頭とした(Popham 1970, 71, n.57)。しかし、第2と第3の足が交差していることから見て、これを前述の Palaikastro 出土の鍔壺(NP34)より新しく考えることは困難である。

次に、Palaikastro 出土のリュトン(C3392)<sup>8)</sup>に頭部を下にして縦向きに描かれたA型の蛸文について見たい(図版2—3)。この蛸文は、縦向きに描かれている点では Knossos 宮殿南正面出土の三把手付壺の例と比べられるが、足の交差が見られず、互いに並行して伸びる足が見られる点で、先に新しいものと考えられた Palaikastro 出土の鍔壺(NP34)と比較される。更に、この蛸文の胴体左側第1の足の、胴部近くで外側へ向った後強く内側に屈曲し、胴部先端近くで外側に円弧を描く特徴的な形態は、Palaikastro 出土の鍔壺の蛸文の胴体左側第2の足の形態と、特に胴部

先端近くで円弧を描く点で、共通する動きが認められる。C3392 のリュトンと NP34 の鏡壺の年代を考える上で、Furumark が J.M II B期とした Isopata の「王墓」出土の三把手付壺に描かれた蛸文に、胴部近くで外側に向かった後強く内側に屈曲し、胴部先端近くで渦巻を描く足が見られる点が注意される(図7—c 参照)。この特徴的な形態の足は、頭部を左にして横向きに描かれた蛸文の胴体下側の第1の足であり、頭部を下に見た場合、C3392 のリュトンに見られた同じ形態の特徴を持つ足と先端部以外は全く重なることになる。両者の類似は恐らく偶然ではなく、この点からも、NP34 の鏡壺と C3392 のリュトンが他のA型の蛸文を持つものに比べて新しいものであることが示唆されよう<sup>9)</sup>。

### 〈B型蛸文〉

ギリシア本土 Argolis 地方 Prosymna 出土の三把手付壺に描かれたB型の蛸文(図版2—4)は、頭部を下に縦向きに描かれ、足には交差が見られ、交差前の両足の間には空間が開けられている。しかし、交差する足が第2と第3の足でなく第3と第4の足である他、交差後の第3の足の形態は、Knossos 宮殿西翼倉庫地区出土の LM II A期とされる三把手付壺(図7—a 参照)の蛸文の第4の足の特徴的な形態と関連すると思われること、又、並行する足が見られること等から、同じ縦向きの Knossos 宮殿南正面出土の三把手付壺の蛸文より新しいものと思われる。周囲の空

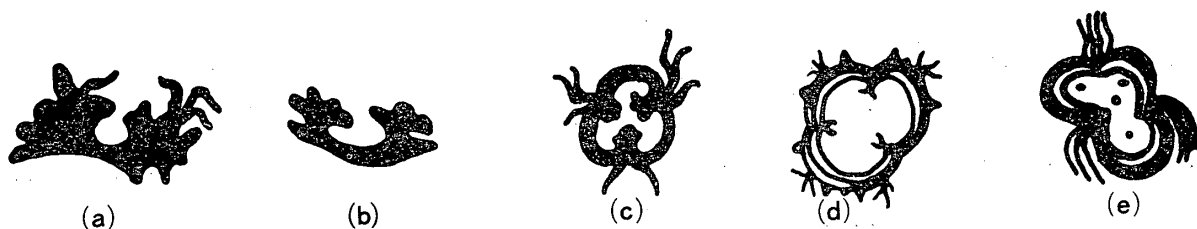


図5 岩文と三葉形岩文

- (a) Marinatos & Hirmer, 1960, Pl. 87. (b) Blegen, 1937, fig. 437. (c) *ibid.*  
 (d) Popham & Sackett, 1970, 216, fig. 8. (e) Evans, 1935, 279, fig. 214.

間を埋める岩文(図5—b)についても、Palaikastro 出土のフラスコ形土器に描かれた岩文(図5—a)と比較して若干便化していると思われ、同じ壺に見られる典型的な三葉形岩文(図5—c)は、この岩文と同じ構成要素を持つ。この点から、三葉形岩文は岩文の便化の過程で成立したものと推測されるが、そうであるならば、NP34 の鏡壺に見られる、内側の瘤を持つ突起部が小さく、内側に輪郭線が入れられて装飾性を強めた三葉形岩文(図5—d)は、初現的な三葉形岩文とは言えないだろう(図5—e の三葉形岩文は Knossos 宮殿出土の注口土器にC型オウム貝文と共存するものである。内側に点が入られ、付着した海草は硬直化しており、型式上この岩文は図5—d の岩文より更に進んだものと思われ、C型海棲生物文の年代を考える上で注意される)。

アイギナ島出土の鏡壺(Aegina 40, 図版2—3)に頭部を斜左下に向けて描かれたB型の蛸文には、胴体右側第4の足に足の交差が見られるだけである。胴体左側では第1と第2の足が並行して伸び、第3の足は第2の足と最初の波の山の部分迄並行するが、細くなって短かく途切れている。

胴体右側でも、第1と第2の足は胴体くびれ部迄しばらく並行して伸びている。吸盤は、これ迄見た例と異なり、しばしば足の内側に付けられ、足の先端部では消略されている例も見られる。胴体のくびれに沿って波打った後、序々に細くなり、内向きに円弧を描く胴体左側第1の足の形態は、Knossos 宮殿西翼倉庫地区出土の三把手付壺の蛸文の第1の足の形態と類似し（図7—a 参照）、その先駆的なものとも見ることが出来る。これ迄の例と異なり、第1の足の先端部は両足共同じ方向に円弧を描いているが、Isopata の「王墓」出土の三把手付壺の蛸文の第1の足の先端部の円弧も同方向に描かれている点も注意されよう（図7—c 参照）。以上の観察から、この鏡壺は少なくとも前述の Prosymna 出土の三把手付壺より古いものではないだろうと推測される。

この Aegina 40 の鏡壺に描かれた蛸文は、第2と第3の足に交差が見られず、並行して伸びる足が見られる点で前述の NP34 の鏡壺のA型の蛸文と比べられるが、その他、なだらかに頭部から胴部へ移行する胴体、足と足との間の細長い空間に連続的に描かれた爪形状の気泡文、やや変化した三葉形岩文の形態、副次的文様が全く見られない胴体と第1の足に挟まれた空間等、両者の蛸文とその周囲の副次的文様には共通点が多く見出される。

ギリシア本土の Argolis 地方 Berbati のトロス墓出土の三把手付壺に描かれた蛸文も Aegina 40 の鏡壺の蛸文と比較出来る（図6—a）。頭部を下に縦向きに描かれた胴体のくびれに沿って緩く波打つ第1と第2の足に対して第4の足は短く、この様な対照は、Aegina 40 の鏡壺例の左側第1、第2の足と短い第3の足にも見られる。又、足と足との間の細長い空間に入れられた帯状の岩文や連続する気泡文も、両者の画面に共通している。

以上に見たB型の蛸文と比べられる例はクレタ島からも出土しており、これらをギリシア本土の地方形とすることは出来ないだろう<sup>10)</sup>。Furumark により LM I B期後半とされた Knossos の「小宮殿」(Little Palace) 出土のアラバストロンと呼ばれる器種に描かれた例（図6—b）では、



図6 第二段階の蛸文付土器

(a) Wace, 1936, 306, fig. 15. (b) Evans, 1913, 87, fig. 94. (c) Davaras, 49.

胴体両側の足は殆んど波打たず、上下の画面を区切る岩文の形態も便化したものと言えよう。又、横向き胴体は、Isopata の「王墓」出土の三把手付壺に描かれている横向き蛸文の先駆をなすものであろう。クレタ島の Makryghialos 出土のアラバストロンにも横向き蛸文が描かれている（図6—c）。この蛸文に見られる足の形態と動きは上述の蛸文と大差なく、吸盤の付けられる位置に若干混乱が見られる点も共通している。この例も、Aegina 40 の鏡壺とほぼ同時期として良いだろう。

## 5 「LM II 期」の蛸文

ここでは一般に LM II 期とされる蛸文を持つ三把手付壺のうち二個について、蛸文及びその周囲の表現について比較検討したい。まず、Evans と Furumark によって LM II A 期とされた Knossos 宮殿西翼倉庫地区出土の三把手付壺（図7—a）について見ると、胴体のくびれに沿って波打つ第1の足の形態は、その先駆的と思われる形態が Aegina 40 の鏡壺その他に見られる。又、第1の足の、胴部先端で内側に屈曲し、細くなりながら再び胴部に沿って伸びる先端部の形態、或いは、第2・第3の足の、隣り合う足と並行して伸びた後強く屈曲し、自身の足に接触する手前で外向きの円弧を描く形態も、先に検討した蛸文にその先駆的と思われるものが見られる。しかし、これらはこの蛸文に於いて始めて、様式化された一つの形にまとめ上げられたと言えよう。又、頭部から各足の間に伸びる髭状の細線は、次に述べる LM II B 期とされた蛸文にも見られるが、これ迄に見た蛸文には見られないものである。これもこの蛸文がこれ迄に見たものより新しい段階に属することを示すものと思われる。

LM II B 期とされる、Isopata の「王墓」出土の三把手付壺に描かれた横向き蛸文（図7—c）



(a) KNOSSOS 宮殿西翼倉庫地区出土 (b) KNOSSOS 宮殿南正面出土 (c) Isopata 「王墓」出土

図7 第三・第四段階の蛸文付土器

(a) Evans, 1935, 306, fig. 240. (b) *ibid.*, 355, fig. 298. (c) *ibid.*, 308, fig. 243.

は、強く屈曲する足、頭部から各足の間伸びる髭状の細線に前述の蛸文との共通点が見られる。又、胴体下側第1の足の形態は、類似するものが既にA型の蛸文に見られることは先に見た通りである。しかし、足に吸盤の表現が見られず、足先は円弧ではなく渦巻を描き、目玉は、これ迄に見られた様に塗りつぶされておらず、細線で引かれた円とその内側に入れられた点で表現されている(図17-1と比較)。特にこの目玉の表現と、紐状の細い足は、一般にLMⅢA<sub>1</sub>期とされているKnossosの「双斧の墓」(Tomb of Double Axe)出土の三把手付壺に頭部を上にして縦に描かれた蛸文と比較出来(Hood 1971, Pl. 15参照)、前述の蛸文よりもこの蛸文が若干新しい時期のものであることを示唆していると思われる。この「双斧の墓」出土の三把手付壺では、蛸文の描かれた画面下端が底部から重ねられた文様帯で区切られている点も特徴的で、この点でもIsopataの「王墓」出土の三把手付壺は共通している(二重の波線文による文様帯もこれ迄には見られないものである)。又、Isopataの「王墓」出土の三把手付壺の胴部画面に副次的文様として描かれている二重の同心円の内側に描かれている三葉形気泡文は、LMⅢA<sub>1</sub>期の文様と共存する三葉形岩(気泡)文の例(図1-c)と、三葉形が分割している点で比べられよう。

これらの点から見て、これら二個の三把手付壺には、Furumarkに従って時期差を認めて良いと思われる。しかし又、Furumarkは同時期に置いているが、Knossos小宮殿出土のアラバストロンとKnossos宮殿西翼倉庫地区出土の三把手付壺の間にも時期差が認められると考えられる。そこで、FurumarkはLMⅠB期からLMⅡB期とした蛸文に三段階を認めたが、これ迄の蛸文の型的検討により、同じ範囲の蛸文に四段階の変遷過程が考えられる。各段階の蛸文について以下にまとめてみたい。

## 6 蛸文変遷の四段階と「LMⅡ期」の問題

第1段階。頭部を斜下、或いは真下に向けて描かれ、胴部上方の空間を区切る第1の足の先は各々外向きに円弧を描き、波打つ第2と第3の足がその最初の波の山頂近くで交差する。各足は相互に比較的自由に空間を区切り、中に点が入れた大きな吸盤が各足の外側に付けられる。足で区切られた空間には多くの様々な種類の副次的文様が描かれる。この段階に属すると思われる蛸文を持つ代表的な土器として、Palaikastro (House β) 出土のフラスコ形土器、Gournia 出土の鏡壺、Zakros 宮殿祠堂出土の鏡壺と三把手付壺、Knossos 宮殿南正面出土の三把手付壺が挙げられよう<sup>11)</sup>。

第二段階。横向きに描かれたものが第一段階に見られた姿勢に加わる。足は交差せず、例外的に交差する場合も、第2と第3の足に交差は見られない。僅かしか波打たない硬直した足の動きが認められ、各足が独立して自由に空間を区切る第一段階とは異なり、特に、第1と第2の足が対になる傾向がある。各足は、間に細長い空間を残しながら並行して伸びる。第1の足の先には内向きの円弧を描く例があり、胴部近くに足先の円弧が描かれる傾向がある様である。足に付けられる吸盤の形は、内部に点を持つものもあるが、殆んどが内部に点を持たない連続する小さな半円により表

わされ、吸盤が描かれる足の側も必ずしも常に外側ではない。足で区切られた空間には、岩文、気泡文、等の副次的文様が入られるが、部分的に空白のまま残される空間が見られ、反対に泡状文が空間の多くを埋める例も見られる。三葉形岩文は、この段階に顕著となった便化した岩文から発生したものと思われ、三葉形気泡文も、この段階に出現したのであろう。蛸文を持つこの段階の代表的土器として、Palaikastro 出土の鏡壺 (NP34)<sup>12)</sup>と一群のリュトン (C3392他)、Knossos「小宮殿」と Makryghialos 出土のアラバストロン、クレタ島以外では Prosymna と Berbati 出土の三把手付壺、アイギナ島出土の鏡壺 (Aegina 40) が挙げられよう。

第三段階。この段階に新しく出現したと思われる蛸文各部の形態として、一旦強く屈曲した後反転して円弧を描く様式化した特徴的な足の形態、列点により表現された吸盤、頭部から各足の間に伸びる髭状の線、一番外側の両足の間に頭部から伸びる舌状の突起、等が挙げられよう。この他、胴体両側の足の左右対称性は、ある程度は既に見られるが<sup>13)</sup>、この段階に強まり、蛸文の足の本数も無視され始めた<sup>14)</sup>。stipple pattern と呼ばれる地文に代表される新しい蛸文周囲の空間処理の方法もこの段階に出現したと思われる。蛸文を持つこの段階の代表的土器として Furumark により LM II A期とされた Knossos 宮殿西翼倉庫地区出土の三把手付壺と Knossos 宮殿南正面出土のエピュラ式杯 (Evans 1935, 362, fig. 302b) が挙げられよう。

第四段階。蛸文の足の形態は、以前のものが基本的には踏襲されるが、吸盤の付かない形がこの段階に一般的になったと思われる。又、LM III期に発達する紐状の足と同心円による目玉の表現の先駆的なものが、この段階に出現したと考えられる。頭部を上縦に描かれる LM III期に一般的な蛸文の姿勢がこの段階に出現したことも考えられる。この段階に代表的な蛸文を持つ土器として、Isopata の「王墓」出土の三把手付壺の他、Evans と Furumark により LM II B期とされた Knossos 宮殿北西の住居址出土の三把手付壺 (Evans 1935, 308, fig. 242)、同宮殿西翼倉庫地区より出土した別の三把手付壺 (Popham, 1970, Pl. 4d) が挙げられよう<sup>15)</sup>。

Furumark は LM I B期後半の蛸文として、筆者が第一、第二段階の蛸文と考える蛸文を挙げており、Evans と同様に LM II A期を LM I B期後半と同時期としている。従って、Furumark によれば、LM I B期に後続する LM II 期に位置づけられる蛸文は、前述の、第四段階とされた LM II B期の蛸文である。一方、Popham によれば第一段階の蛸文とされたものが描かれている Knossos 宮殿南正面出土の三把手付壺が LM I B期に後続する LM II 期の初頭に位置づけられている。この様に LM II 期の蛸文の型式観には大きな差異が認められるのである。筆者によれば、LM I B期の典型的蛸文と思われる Knossos 宮殿南正面出土の三把手付壺を初頭とはいえ LM II 期とする Popham の主張には、先に見た様にその論拠も不明瞭であり、同意し難く、Furumark の LM II A期と LM I B期の同時期平行説についても、Furumark の LM II A期を代表する蛸文は筆者の第三段階に位置づけられるものであり、LM I B期後半とされた蛸文との時期差は明らかと思われるので、これにも賛成出来ない。Furumark は LM II A期を LM I B期と同時期と考えることにより LM I B期の内容を拡く解釈し、Popham は逆に LM II 期の内容を拡く解釈して

いると言えよう。これらに対し、四段階に区分された蛸文を眺めれば、緩やかな変化の流れの中で、特に第二段階の蛸文から第三段階の左右対称的に配された特徴的な形態の足を持つ蛸文への変化は一見他とは際立っており、この蛸文第三段階を改めて LM I B 期に後続する LM II 期と呼ぶことは可能であり、妥当と思われる。又、三把手付壺についてもはや LM II 期の指標と考えることは出来ないとしても、第二段階以前の蛸文が描かれた例がないエピュラ式杯は第三段階に出現したものであると思われるので、蛸文第三段階を改めて LM II 期とする考えは、この点からも支持されよう。

以下では蛸文以外の文様についてこの段階に相当する型式を考えていくが、その前に、LM II A 期とされた、Knossos 宮殿南正面出土の蛸文が描かれた鏡壺について見ておきたい(図7—b)。描かれた蛸文は所謂B型であり、頭部をやや斜め左下に傾けて描かれている。鏡壺の下部が欠損しているので胴体下に描かれた足の一部は明らかでないが、胴体上の第1と第2の足は、殆んど波打たないまま並行して伸び、両足の先端部は円弧を描きながら接触している。胴体下の第1の足は胴体上の第1の足と同じ位置迄伸びるが、強く屈曲して、胴体先端に接触しながら円弧を描く。吸盤は胴体上第1の足には全く省略されており、胴体下第1の足の外側に付けられた吸盤は円弧部分では内側に付けられている。蛸文周囲の空間は、蛸文に沿って引かれた輪郭線の内側を泡状文が埋めている。副次的文様としては他に、足先端の円弧内に入れられた三葉形気泡文が見られるのみである。このような蛸文及びその周囲の表現を各々第二、第三段階のものと比較してみると、吸盤が足の先端迄付けられた足は第二段階の蛸文に共通して見られるものではあるが、吸盤の全く省略された足や、強く屈曲した後、反転して円弧を描く足は、第三段階の蛸文に見られるものである。蛸文周囲が泡状文で埋められた例は、先に蛸文第二段階とされた Palaikastro 出土のリュトン(C3392)に見られるが、この例では泡状文は途切れており、残された空間には通常の岩文も描かれ、泡状文に輪郭線は付けられていない。足に沿った線上に泡状文が付けられたものは、蛸文第二段階とされた二個のアラバストロンに見られるが、いずれも空間をこの鏡壺に見られる様に完全に埋めていない。一方、この鏡壺の泡状文に付けられた輪郭線は、第三段階の蛸文の周囲の stipple Pattern の輪郭線と比較出来る。三葉形気泡文は蛸文第二段階のアラバストロンに見られるが(図6—c 参照)、この段階の蛸文のいずれにも足先の円弧内に文様が入られる例は見られない。一方、このような表現は、蛸文第四段階とされた Isopata の「王墓」出土の三把手付壺に描かれた、点が内側に入れられた蛸文の足先の渦巻、或いは、同じ壺に描かれた、sea anemone (FM27) が内側に入れられたカイダコ文(?)の足先の渦巻と比較され(図7—c 参照)、恐らくその先駆的なものと思われる。

この鏡壺に描かれた文様には、以上に見た様に、この鏡壺が蛸文第二段階より新しいものであることを示唆する部分を指適出来るが、又、これに、蛸文第二段階と第三段階の中間的な形態を認めることも困難である。そこで、この鏡壺に描かれた蛸文についても、部分的に古い形態を留めているが、先に第三段階とされた蛸文と並存したものと考えることにする。

## 7 マリン・スタイルの型的検討 ii —カイダコ文—

現在知られているカイダコ文はその殆んどが所謂B型であり、吸盤内に点が入れられているA型のカイダコ文の資料は僅かである。Pseira 出土の鏡壺に巻貝文と共に描かれたA型のカイダコ文 (Mountjoy 1972, 126, fig. 1, Pl. 36 参照) は、そのうちの一つであるが、その年代の推定にとっては、輪郭に沿って内側に線が入れられた三葉形岩文が注意される。この岩文は、第二段階とされたA型の蛸文が描かれた先述の Palaikastro 出土の鏡壺 (NP34) に見られたものと比較され、把手基部周囲に描かれている通常の岩文の表現も NP34 の鏡壺の岩文と類似している。この Pseira 出土の鏡壺では巻貝文の他に多くの泡状文が画面の空間を埋めているが、この点では Palaikastro 出土のリュトン (C3392) が想起される。これらの比較から、この鏡壺は蛸文第一段階相当というよりも、むしろ蛸文第二段階相当と思われる。

上述の鏡壺と同様、カイダコ文 (B型) が画面に大きく描かれ、カイダコ文に沿って様式化した岩文が描かれている、一般に“Abbot jug”と呼ばれるエジプト出土の注口土器 (図版3—1); 或いはギリシア本土の Kakovatos 出土の三把手付壺にも、三葉形岩文が見られる。この三葉形岩文は先述の Prosymna 出土の三把手付壺や Aegina 出土の鏡壺に見られるものと殆んど同じである。通常の岩文についても Abbot jug と Kakovatos 出土の三把手付壺は、その特徴的な表現<sup>16)</sup>で共通している。B型オウム貝文が描かれた Phaestos 出土のリュトン (図版3—4) にも同様な岩文の表現が見られ、又、岩文の内側に白抜きで表現されている点では異なるが三葉形岩文も上記二例に見られるものと類似している。このリュトンの頸部には、Knossos の「小宮殿」出土のアラバストロン底部に見られた様な様式化した岩文が描かれており、カイダコ文周囲の空間には、Makryghialos 出土のアラバストロンに見られた三葉形気泡文が見られる。同様な岩文と三葉形気泡文は、“Marseille ewer”として有名な、B型のカイダコ文が描かれた水差に見ることが出来る (図版3—3)。カイダコ文は四葉形、或いは三葉形岩文と交互に配置されており、前述の Kakovatos 出土の三把手付壺に見られるカイダコ文の配置と基本的に変わらない。カイダコ文は小形で、足の表現はこれ迄見てきたものより簡略化してあるが、足と足の間にはU字形気泡文が入れられ、貝の部分に沿って岩文が描かれている。ケオス島の Hagia Irini 出土のアラバストロン (図版3—2) は、カイダコ文周囲の空間に三葉形気泡文が入れられている点で、上述の Phaestos 出土のリュトンと“Marseille ewer”に比較される他、空間を埋める泡状文の点では、蛸文第二段階とされた Palaikastro 出土のリュトン (C3392) と比べられる。以上に見たB型のカイダコ文を持つ一群の土器はいずれも蛸文第二段階相当として良いと思われるが、B型カイダコ文を持つものの中には、これらより型式上一段階進んでいると見られるものがある。

蛸文、カイダコ文を問わずこれ迄に見た海棲生物が描かれた鏡壺では、肩部より上の器表面は胴部画面の延長とされ、岩文その他が描かれていた。しかし、B型カイダコ文が描かれた Basel 考古博物館所蔵の鏡壺 (図版4—1) を見ると、注口と把手基部を内側に囲んで細い平行線が巡らさ



れ、圈内には波線文（図12—f 参照）が描かれている。胴部周囲にカイダコ文が間隔を置いて配される点は“Abbot jug”や Pseira 出土の鏡壺と変わらないが、その間の空間には、これらの壺では種々の副次的文様が自由に入れられているのに対して、岩に付いた海草文（spray frond）が大きく描かれるだけであり、様式化した空間表現が認められる。蛸文第二段階とされた上述の一群の土器に見られた様なカイダコ文に沿った形の岩文や三葉形気泡文が見られないこと、画面下を区切る横線から枝状に伸びる、退化した形と思われるこれ迄に見られない岩文の形態、便化したカイダコの貝の表現、等の点からもこの鏡壺は、むしろ蛸文第三段階相当と考えた方が良いと思われる。

Phylakopi 出土の水差（図8）にもB型のカイダコ文が岩文に囲まれた空間に描かれている。このカイダコ文は、これ迄になく小さいもので、B型ではあるが、大きさの点ではむしろC型と比べられるものである。水差の胴部以下は欠損しているが、胴部に横向きに描かれていたB型の蛸文の大体の形が復元出来る。この蛸文は、第1と第2の足が胴体のくびれに沿って波打ちながら並行して同じ長さ迄伸び、各々内側に円弧を描いており、円弧が接触している点は、第三段階とされた、Knossos 宮殿南正面出土の鏡壺に描かれた例と類似している（図7—b 参照）。この水差の年代を



図8 蛸文付水差 Phylakopi 出土  
(Bosanquet, 1904, Pl. 12b.)

考える上で注意されるのは、蛸文、或いはカイダコ文の周囲の空間に、気泡文、岩文といった副次的文様が全く見られない点である。この様な空間は、これ迄に見た蛸文第二段階相当の土器には見られず、蛸文第三段階に出現したと思われるエピュラ式杯に描かれた海棲生物文の周囲の空間と比べられる。更に、この水差の肩部には、大きく内湾した部分で肩部を四分する大きな岩文が描かれているが、この様な岩文は蛸文第二段階相当の土器には見られず、恐らく“Marseille ewer”或いは Aegina 40 の鏡壺の肩部に見られる様な岩文の発達したものであると思われる。これらの点から、この水差の年代を蛸文第三段階相当と考えることは可能であり、そうであるならば、この段階になって空間を泡状文、stipple pattern 等で充填する方法と同時に、空間を空白として残す方法が空間の表現に新しく加わったと言えよう。

Phylakopi 出土の水差に見られた小形のB型のカイダコ文は、ギリシア本土の Vapheio 出土の両把手付壺（図9）にも見られる。この壺の器表面は波打つ太い縦帯で区切られ、区切られた器表面は、左上から右下に走る葉文による帯（点線を中心に、両側に葉文が同方向に向かい合う形で並べられている：葉文が並べられて作られる帯を以下では葉文帯と呼ぶことにする）により分割されている。この分割された帯状の器表面は上下交互に二つの異なる文様により装飾されている<sup>17)</sup>。そのうちの一つは泡状文で埋められているが、B型のカイダコ文がその内側に見られる。この斜行す



図9 Vapheio 出土の両把手付壺  
(Bosanquet, 1904, Pl. 11)

る泡状文の帯の上下両側は様式化した岩文の形となっており、この帯は泡状文で充填された「岩文の帯」と形容することが出来よう。全体から見ればカイダコ文が岩文の内側に封じ込められた形の表現は、これ迄に見られない新しい表現と言えるが、部分的に見れば、カイダコ文周囲の空間が泡状文で埋められている点で、先に第三段階とされた Knossos 宮殿南正面出土の鏡壺に描かれた表現と比較出来る。この様に、この両把手付壺も蝸文第三段階相当の可能性が考えられるが、更に、前述の Phylakakopi 出土の水差と同じく頸部は海綿文と呼ばれる文様で装飾され、又、器表面を区切る葉文帯と同じものが Phylakopi 出土の水差の把手に見られることも、両者の同時期性を示唆し、この可能性を裏付けるものと言えよう。

B型のカイダコ文が描かれた Zakros 宮殿西翼の貯蔵室出土の水差（図版4—3）は、しばしば先述の“Marseille ewer”と比較される。しかし、描か

れたカイダコ文はより小形化しており、貝の部分の表現は、Basel 考古博物館所蔵の鏡壺のカイダコ文の同じ部分と同様、便化している様に思われる。又、カイダコ文周囲の帯状の泡状文の表現も様式化していると言えよう。カイダコ文は頸部にも描かれているが、その周囲を網状文で埋める表現には、これ迄に見た蝸文或いはカイダコ文の周囲を泡状文で埋める表現との関連が考えられる。恐らくこの水差も“Marseille ewer”より一段階進んだものと考えて良いのではないかと思われる。

ケオス島の Hagia Irini からは先述の様に、交互様式の土器とエピュラ式杯が同時期と考えられる崩壊層から出土しているが、これらと共にカイダコ文が描かれた水差（図版4—4）が出土している。この水差に描かれたカイダコ文の吸盤は点で表現されており、Knossos 宮殿西翼倉庫地区出土の三把手付壺に描かれた第三段階の蝸文と共通している。カイダコ文周囲には三葉形岩文が見られるが、その他には副次的文様は全く描かれていない。これらの点に加え、器形的にもこの水差が第二段階の水差から一段階進んだものと見ることは可能であろう。

C型の海棲生物文、或いは前述の Phylakopi 出土の水差や、Zakros 宮殿出土の水差に見られる B型のカイダコ文からは、海棲生物文の小形化する傾向が推測される。メロス島の Phylakopi 出土のアラバストロン（Melos 48: 図版4—2）はB型のカイダコ文が描かれている点で、先述のケオス島の Hagia Irini 出土のアラバストロンと比べられるが、描かれたカイダコ文はより小形であり、カイダコ周囲には三葉形気泡文は見られず、輪郭線のついた泡状文で、より多くの空間が埋

められている。更に Hagia Irini 出土例では画面の上部に同じ葉文帯が三段に重ねられているのに対し、Phylakopi 出土例では上下の葉文帯の中間に先述の Basel 博物館所蔵の鍔壺に見られた波線文が挟まれている。これらの点は、このアラバストロンが先述のケオス島 Hagia Irini 出土のアラバストロンより若干新しく、蛸文第三段階相当のものである可能性を示唆するものと思われる<sup>18)</sup>。

### 8 マリン・スタイルの型式的検討 iii 一星形文一

写實的に描かれた海棲生物文が特徴とされるマリン・スタイルの中で、star fish と呼ばれる、中心部が同心円による星形の文様は特異である。この様式化した文様を小論では先に星形文と呼んでおいた。この星形文は通常巻貝文と組み合わせられており、殆んど例がリュトンに描かれたものである。以下ではこの星形文を持つ一群のリュトンについて検討したい。これらのリュトンには普通三個の星形文が肩部に一定の間隔をあけて描かれ、各々の下には二個の巻貝文が向き合う形に描かれている。各星形文の間の空間の上半部には、画面上を区切る横線に付けて岩文が描かれている。

Zakros 出土リュトン (C2085: 図版 5—1) では岩文は星形文の間と画面下方に描かれている。内側が部分的に丸く塗り残された形のこの岩文は、先述の蛸文第二段階とされた Palaikastro 出土



(a) Palaikastro 出土 C 3397



(b) Palaikastro 出土 BM A 684



(c) KNOSSOS 出土

図10 星形文付リュトン

(a) Dawkins, 1903, 311, fig. 10.

(b) Forsdyke, 1925, 110, fig. 139.

(c) Bossert, 1921, 166.

の鏡壺 (NP34) の把手周囲に描かれている岩文と比較出来る。この岩文が蛸文第三段階には描かれなくなったとすれば、このリュートンは蛸文第二段階に位置づけ得ようが、この岩文が蛸文第三段階迄存続したことも考えられる<sup>19)</sup>。又、岩文の他に副次的文様が見られない点から見ても、このリュートンが蛸文第三段階相当である可能性を全く否定することも出来ないと思われる。

Palaikastro 出土リュートン (C3397) の各星形文の間の空間には、海草文 (spray frond) が付いた、泡状文で内側が充填された岩文が描かれている (図10—a)。この海草文が付いた岩文は星形文と一種の交互様式を作っているが、この点では先述の Basel 考古博物館所蔵の鏡壺と比べられる。又、頸部に描かれた海綿文は Phylakopi 出土の水差その他の頸部装飾と比べられる。これらから、このリュートンは蛸文第三段階相当と考えて良いと思われる。このリュートンに見られる海草文が付いた岩文とほぼ同じものが、大英博物館所蔵の Palaikastro 出土の角形リュートン (BM A684) に描かれている (図10—b)。リュートン下部は欠損しているが、両者はほぼ同時期のものであろう。

Knossos 出土の角形リュートンには星形文は二個が描かれるだけであるが、その間の空間には双斧文が描かれている (図10—c)。筆者の知る限り、海棲生物文が描かれている画面に異質な双斧文が入られる例は、この例を含め星形文が描かれた画面だけである。このリュートンには又、星形文と双斧文の間の、或いは巻貝文周囲の空間を埋める、これ迄には見られない様式化した岩文 (FM33) が見られる。アーチ形と形容されるこの岩文には蛸文第二段階の海棲生物文と共存する例は見られず、その波線による輪郭線は蛸文第三段階の三把手付壺に見られる stipple pattern の輪郭線と共通の性格が認められる。又、この岩文の例は、先述のケオス島の Hagia Irini 崩壊層から出土した土器片にも見られ (Caskey 1962, Pl. 95, H11), これらの点から見て、このリュートンは蛸文第三段階相当と思われる。

Zakros 宮殿出土の角形リュートン (C13935: 図版 5—2) では口縁部下の突帯の下に葉文帯が巡らされ、その下には小さな双斧文が帯状に横に並べられ (図12—g 参照), 星形文と巻貝文はその下の器面に描かれている。双斧文が見られる点で前述のリュートンと比べられるこのリュートンには、星形文の間の空間に前述のリュートンに描かれた岩文と類似する、線で内側が埋められた岩文 (tricurved rock-work : FM62) が描かれている。このリュートンの下端からは先に Basel 考古博物館所蔵の鏡壺に見られた様な枝状の岩文が伸びている。恐らくこのリュートンも前述のリュートンとほぼ同時期と考えて良いだろう。

Tricurved rock-work は、蛸文第三段階に出現したものと思われ (第三段階の蛸文が描かれている Knossos 宮殿西翼倉庫地区出土の三把手付壺の把手下にも描かれている), 蛸文第二段階と第三段階を区別する上での重要な指標と考えられるが、Zakros 宮殿からは、この岩文が星形文の間の空間に描かれたリュートンが出土している (図版 5—3)。先述の Zakros 宮殿出土のリュートン (C2085) とこのリュートンを比べると、このリュートンには前者に見られる均整のとれた形態は失なわれ、画面が葉文帯によって狭められている点も異なっている。しかし、又、星形文と巻貝文の配置は殆んど同じであり、各々の文様個々の形態にも僅かの相違しか認められない (中心に点が打た

れる星形文の同心円は、前述のリュトン（C13935）と比べられる）。文様個々について見た場合、蛸文の第二段階と第三段階であまり変わらない例がこれ迄にも見られたが、このリュトンもその一例と言えるかも知れない。

以上見てきた星形文を持つリュトンは、蛸文第二段階に位置づけられる可能性もあるC2085一点を除き蛸文第三段階相当と考えて良いものであろう。星形文の様式化した形態自体も、これらが所謂マリン・スタイルの中で新しいものであることを支持するものと思われる。

## 9 マリン・スタイルの型的検討 iv —C型海棲生物文—

先述した様に、Mountjoy は吸盤の形で海棲生物文を分類し、A、B両型の海棲生物文が廃れて以後、LM I B期後半にC型海棲生物文が代って盛行したと考え、C型が描かれたものの中でも、A、B両型と同じく副次的文様が画面に多く描かれるものは、A、B両型が描かれたものと並存した古い時期のものと考えられた。しかし、これ迄に行った検討からは、少なくともB型の海棲生物文は蛸文第三段階迄存続したと思われ、又、Mountjoy 自身がLM I B期終末とした、海棲生物文が描かれたエピュラ式杯は副次的文様で空間が埋められている。そこで、副次的文様が多用されていることで古い時期のC型海棲生物文付土器の例に挙げられている(Mountjoy 1974, 180, n.4) Palaikastro 出土の角形リュトン（C3384: 図版5—5）を再検討したい。先ず、口唇部から口縁部下に巡らされた突帯迄の装飾は、先に蛸文第三段階相当とされた星形文が描かれてたPalaikastro 出土の BM A684 のリュトンと殆んど全く同じと言えるものである。又、突帯下には、泡状文で充填された「岩文の帯」が縦に描かれ、その中に封じ込められた形でC型の蛸文が見られるが（図3—a）、この表現は先述の Vapheio 出土の両把手付壺に見られるものと同じである。以上の点からこのリュトンは蛸文第三段階相当と考えられよう。

C型カイダコ文が泡状文に囲まれて描かれた Palaikastro 出土のリュトン（C3398: 図版5—6）も、描かれた縦向きの岩文は全て右向きに描かれている点で前述のものとは異なるが、部分は良く似ており、又、頸部接合部上の波線文は先述の Basel 考古博物館所蔵の燈壺の把手周囲の波線文と比較出来、同じく蛸文第三段階に位置づけられよう。

この様に、周囲の空間が空白のまま残されていないC型の海棲生物文も、周囲の空間の表現を良く観察すれば、蛸文第三段階に位置づけられることは明らかであろう。C型海棲生物文は恐らくこの段階に出現し、同時期のB型の海棲生物文と同様、その周囲の空間の表現には相反する二つの方法が用いられたと推測されるのである。

## 10 「LM I B期」の幾何学文

LM I B期に分類されている文様には、海棲生物文、或いは植物文と並んで、多くの幾何学文があるが、以下ではその代表的なものであるジグザグ文と二重渦巻文について検討したい。

### <ジグザグ文>

横方向に器面を一巡するジグザグ線による帯が重ねられ器面を覆うもので、ジグザグ帯の間の空間は、空白のまま残されるものと空間に沿って小円その他で埋められるものがある。クレタ島の Sklavokampos 出土の注口土器 (Platon 1968, 163, fig.59) とギリシア本土 Attica 地方の Thorikos 出土の三把手付壺 (Benzi 1975, Pl.34-568) には同じジグザグ帯によるジグザグ文が描かれており、その画面上を区切り、肩部には先に蛸文第三段階相当とされた Phylakopi 出土のアラバストロンに見られる様な葉文帯と波線文が組合わされた装飾帯が描かれている。この点で両者の土器は双方共、同じく蛸文第三段階相当と考えることが出来よう。Thorikos 出土例ではジグザグ帯の凹部全てに双斧文が上下交互に付けられているが (図11-a)、同様な例はギリシア本土の Aghios Stephanos 出土の壺 (図11-b)、或いは Thermon 出土の三把手付壺 (Vermeule 1964, 315) にも見られる<sup>20)</sup>。このジグザグ文の表現は LM III A期とされる Knossos の “Royal Villa” 出土の杯に描かれた、凹部に様式化したアイリス文が上下交互に入れられたジグザグ文 (図11-c) を想起させ、このことは上記二例の土器の編年上の位置付けを間接的に支持するものであろう。

Gournia 出土のリュトン (Boyd-Hawes 1908, Pl.I-2) とギリシア本土の Routsis 第二号墓出土の鏡壺 (Hägg 1982, 34, fig.12) にもジグザグ帯の全ての凹部にはないが、ジグザグ文の画面上を区切る装飾帯の下のジグザグ帯の凹部に双斧文が描かれている。両者はこの点で上述の Thorikos 出土例他と比べられるが、又、両者共ジグザグ文の上には海綿文が見られ、この点では Sklavokampos 出土の注口土器とも比べられ、これらも蛸文第三段階相当と考えることが出来よう。頸部装飾、或いは装飾帯として使われた海綿文が海棲生物文と共存する例を見ると、いずれも海棲生物文とその周囲の空間の表現から蛸文第三段階に位置づけられるものである。従って、上記の例を併せて考えるならば、この様に使われた海綿文は蛸文第三段階の一つの指標と考えて良いかも知れな

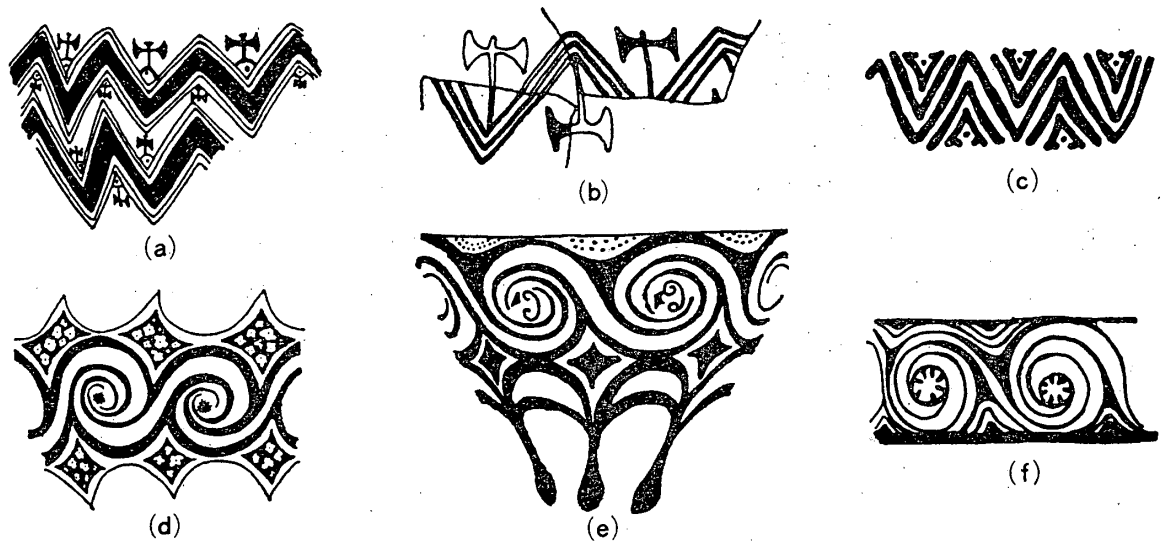


図11 ジグザグ文と二重渦巻文

- (a) Benzi, 1975, Pl. 34-568. (b) Rutter, 1976, 57, Ill. 18-894. (c) Popham, 1967, Pl. 80a,  
 (d) Müller, 1909, Pl. 17. (f) Hood, Huxley, Sanders, 1959, 234, fig. 26.

い。ジグザグ文が描かれたエジプトの Sedment 出土のアラバストロン (Evans 1935, 270, fig. 200) の頸部も海綿文で装飾されている。このアラバストロンのジグザグ文の画面上を区切る葉文帯の下のジグザグ帯の凹部は泡状文で充填されているが(同じ表現は Routsis 第二号墓出土のアラバストロンにも見られる; Hägg 1982, 4, fig. 14), この表現は、蛸文第三段階の海棲生物文の周囲の空間を泡状文で充填する表現と関連しよう。これらのアラバストロンも蛸文第三段階に相当するものと思われる。

以上、LM I B期のジグザグ文付土器として知られている主なものを検討したが、いずれも蛸文第三段階相当と考えられ、ジグザグ文はこの段階に盛行したものと推測される。このことは、LM II—III A:1期とされる Knossos の「戦士の墓」から上述のジグザグ文と殆んど変わらないジグザグ文<sup>21)</sup>を持つ土器が出土していることから支持されよう (Hood 1952, 268, fig. 11, III-3)。

### 〈二重渦巻文〉

横方向に器面を一巡する二重渦巻文は、普通重ねられて器表面を覆い、最下段から底部迄の空間には、底面を下から見ると円花文の形となる arcade pattern と一般に呼ばれる文様が描かれる。二重渦巻文の山と山が上下に重ねて描かれると、その間に内湾した空間が出来ることがあるが、この空間にはその形に従う図形で埋められる。ギリシア本土の Kakovatos 出土の三把手付壺に描かれた例は中でも正確に描かれた例と思われるが、空間に描かれた内湾する菱形は多くの海綿文で飾られている(図11—d)。この壺に描かれた二重渦巻文が便化していない古いもので、又、海綿文について前述した処が正しければ、二重渦巻文もジグザグ文と同様に蛸文第三段階に盛行したものであろうと推測される。

二重渦巻文の画面上を区切る装飾帯とその下の二重渦巻文の間の空間には、しばしばその形に沿って点線が重ねられ、先述の tricurved rock-work に比較出来る形になっている。Knossos の「王の道」(Royal Road) 北側の発掘で出土した注口土器(図11—e)、或いは Zakros 宮殿祠堂出土の水差 (Platon 1971, 111参照)に見られるこの様な表現は、LM III A期の二重渦巻文の上下の空間を埋める表現(図11—f参照)と近く、この点からも二重渦巻文の編年的位置についての上述の考えは支持されよう。

## 11 「LM I B期」の装飾帯

これ迄検討してきた土器の多くは胴部画面上端が装飾帯によって区切られており、この部分も土器の年代に重要と思われる。以下では特に蛸文第三段階の装飾帯について蛸文第二段階のそれと対比しながら見てみたい。蛸文第三段階の装飾帯の中心は「葉文帯」であるが、これは蛸文第一段階とされたマリン・スタイル土器には見られない。図12は葉文帯が見られる装飾帯を示す。図12—a～cは蛸文第二段階とされたマリン・スタイルの土器に見られるものである。葉文帯は茎を表わすと思われる幅の狭い平行線の両側に葉文が向き合う形で同方向に描かれるものが本来の形に近く、古い形と思われるが、先述の“Abbot jug”にはこの形の葉文帯が頸部くびれ部を中心として描か

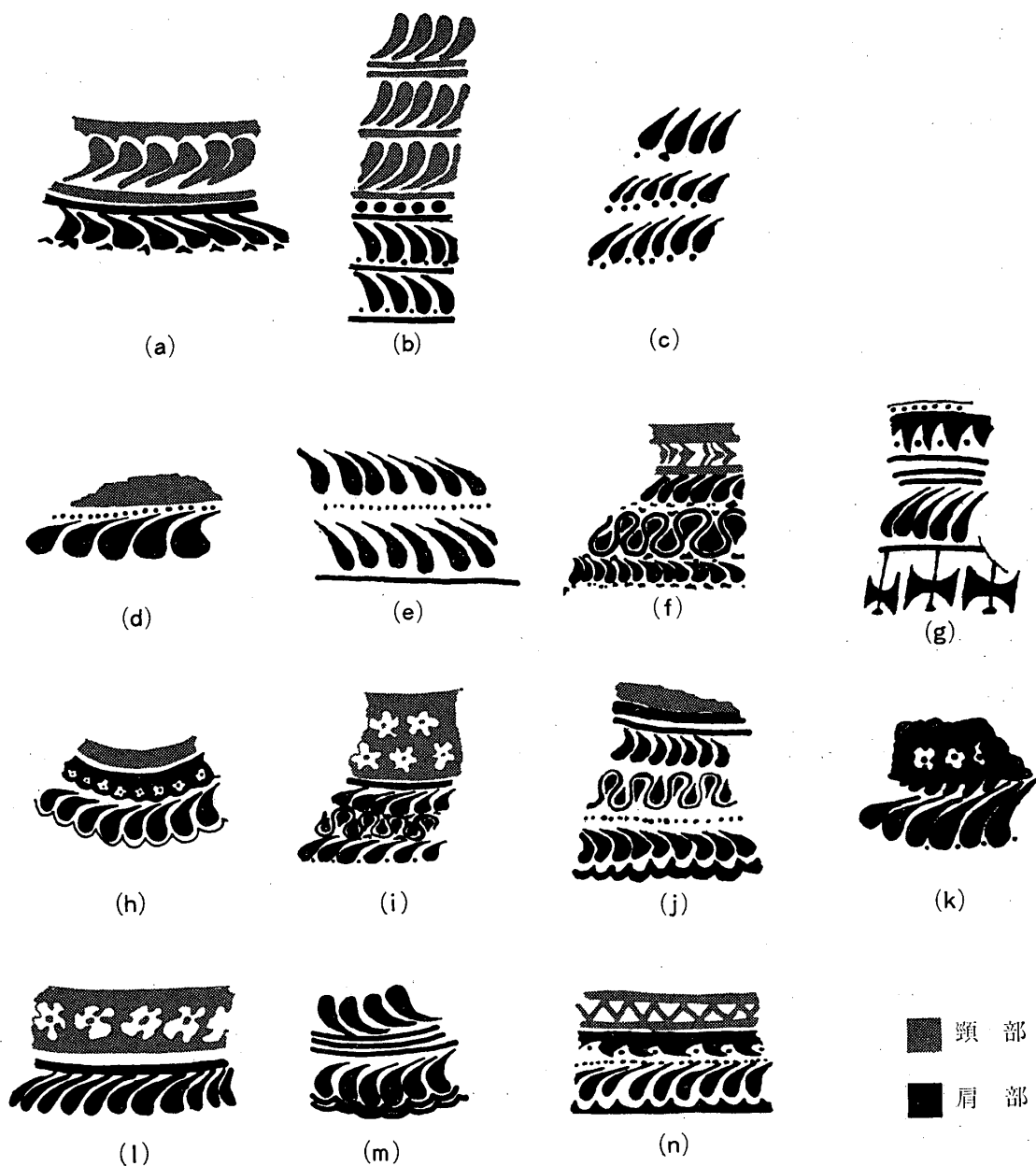


図12 葉文帯を持つ裝飾帯

- (a) Buchholtz & Karageorghis, 1973, 312, Pl. 912. (b) *ibid.*, 308, Pl. 900. (c) Luce, 1969, 32.  
 (d) Evans, 1935, 306, fig. 240. (e) Platon, 1971, 111. (f) Renflew, 1978, 408, fig. 1.  
 (g) Mountjoy, 1977, 559, fig. 3. (h) Platon, 1971, 107. (i) Platon, 1968, 163, fig. 59.  
 (j) Benzi, 1975, Pl. 34-568. (k) Schachermeyer, 1962, 282, Pl. 55. (l) Evans, 1935, 270,  
 fig. 200a. (m) Higgins, 1976, 106, fig. 118. (n) Popham, 1967, Pl. 80a.

れている(図12-a)。“Marseille ewer”には頸部くびれ部の突帯を中心軸として、類似の葉文帯(図12-b)が見られるが、その上下に更に葉文帯が同じ向きに重ねられている点では、ケオス島の Hagia Irini 出土のアラバストロンの口縁部に見られる同じ向きに三段に重ねられた葉文帯と比



べられる。図12—d～hは第三段階相当の海棲生物文が描かれているものに共存する例であり，図12—i～lはジグザグ文，図12—m～nは二重渦巻文が各々描かれているものと共存する例である。蛸文第三段階には Phylakopi 出土の水差の把手上面や Vapheio 出土の三把手付壺に点線を中心軸とする葉文帯が見られたが，図12—dに示された葉文帯の上の点線は，この葉文帯の中心線と恐らく関係があろう。図12—e, j, nにも葉文帯の上に同様な点線が見られ，この様な点線はこの段階の装飾帯の一つの特徴と思われる。先に図12—fの様な波線文は蛸文第三段階に出現したと考えたが，海綿文と共存する例（図12—i）があり，上に点線を持つ葉文帯と共存する例（図12—j）があることは，この考えを裏付けるものだろう。この波線文が描かれた土器の頸部には，図12—iに見られる様な海綿文の他に，アダーマークと呼ばれる鋸歯状の文様（図10—b, 12—g 参照）が見られる（Evans 1935, 289, fig.224）。蛸文第二段階のマリン・スタイルの土器にこの文様が描かれる例は見られないことから，この文様も蛸文第三段階になって使用され始めたことが考えられる。

蛸文第二段階には葉文帯は，土器の頸部くびれ部をその中心として描かれたことが推測されるが，蛸文第三段階にも多くの葉文帯は同様に描かれている。しかし，図12—hとnでは頸部くびれ部以下に各々海綿文とアダーマークが見られ，これは葉文帯の中心を頸部くびれ部とする方式が崩れた結果として解釈出来るかも知れない。これらについては，文様自体の他，文様の配置からも蛸文第二段階より進んだものであることが推測されるのである。更に図12—hの葉文帯の下に付けられた連弧線は，図12—j, mに類例が見られるが，図12—aの葉文帯下に付けられた文様由来のものかも知れない。



図13 Knossos 宮殿出土  
(Evans, 1928, 122, fig. 58a)

先に tricurved rock-work 文は蛸文第三段階に出現したと考えられたが，この文様と共存して，上には点線が，下には図12—hの葉文帯の下に付けられたものと同じ連弧線が付けられた葉文帯が，Evans が LM

Ⅱ B期のものとした Knossos 宮殿出土の土器片に描かれている(図13)。この例は，以上の蛸文第三段階の装飾帯についての観察を裏付ける資料と思われる。

## 12 交互様式の型式的再検討

交互様式は始めに見た様に，C型の海棲生物文と共に LM I B期後半に位置づけられているが，C型海棲生物文はこれ迄の検討から蛸文第三段階の海棲生物文の一種と考えられる。以下では交互様式について改めて検討したい。

Coldstream によれば，交互様式の文様は相互に全く無関係なものとされ，これ迄の検討で蛸文第三段階とされた，星形文と岩文，或いは，カイダヨ文と海草文が交互に描かれたマリン・スタイルの例は交互様式から除外されている。この点では，星形文と双斧文が描かれたキュテラ島の Kastri 出土の注口土器（μ 48：図14—a）は交互様式の典型と言えよう。しかし，この同じ組合わ

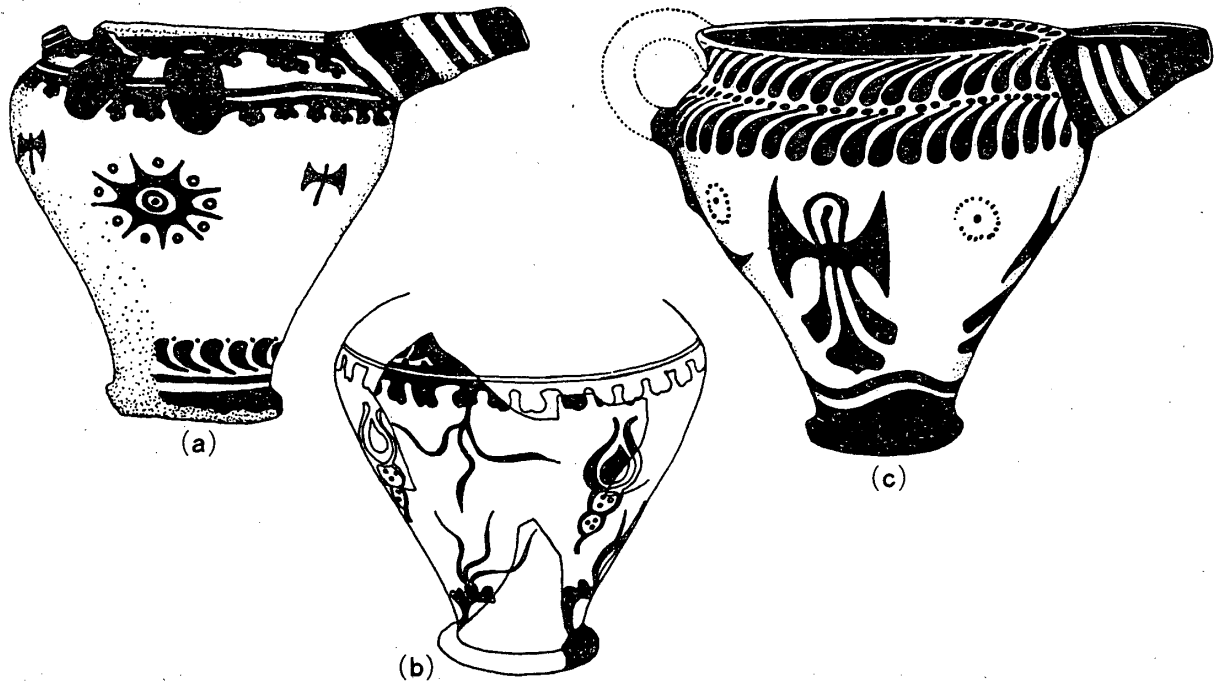


図14 交互様式の土器

- (a) Coldstream & Huxley, 1972, Pl. 34- $\mu$  48. (b) Bosanquet, 1904, Pl. 12 a.  
 (c) Boyd-Hawes, 1908, Pl. G-1.

せは、やはり蝸文第三段階とされた Knossos 出土のリュトン (図10-c) に見られる。 $\mu$  48 の注口土器の底部上に見られる葉文帯については、蝸文第三段階とされた Zakros 宮殿西翼貯蔵室出土の水差 (図版 4-3) の底部上の葉文帯と比べられよう (蝸文第二段階とされた “Marseille ewer” の底部上にはこの様な葉文帯は描かれていない点に注意)。以上の点から、この注口土器も蝸文第三段階相当と考えられよう。Coldstream の説く様にこの様な組み合わせを持つものを別扱いし編年上の意味を持たせるのではなく、この段階になって文様配置の交互性が強まるという形で様式化が進み文様相互の関係も弱まった結果として、この様な例を解釈する方が妥当と思われる。

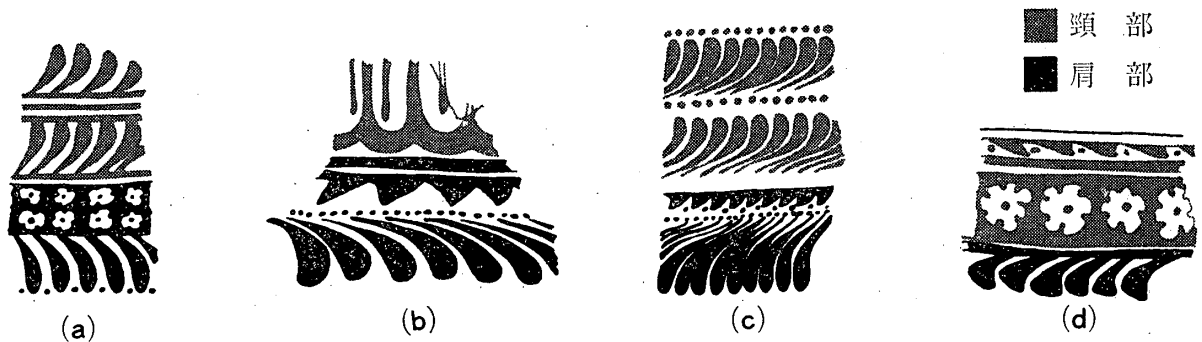


図15 交互様式の土器の裝飾帯

- (a) Hägg, 1982, 34, fig. 13. (b) Marinatos & Hirmer, 1960, Pl. 82, left.  
 (c) Coldstream & Huxley, 1972, Pl. 36- $\nu$  34. (d) Evans, 1935, 183, fig. 145b.

先に蛸文第三段階とされたジグザグ文付鏡壺とアラバストロンを出土したギリシア本土 Routsis 第二号墓からは、蕨の葉文とペンダント文 (FM36) が組合わされた文様と、渦巻にアダーマークが付いた形の文様という、互いに無関係の文様が交互に描かれた交互様式の水差も出土している。画面上部の装飾帯は頸部くびれ部の直下に海綿文が描かれており (図15-a), 図12-h の例と比べられ、この水差も同じ墓から出土した他の土器と同じく蛸文第三段階と考えて良いだろう。

メロス島の Phylakopi 出土の、巻貝文と海草文 (spray frondo) が交互に描かれた壺 (図14-b) は、Coldstream により彼自身の規定にもかかわらず交互様式とされている。描かれた巻貝文はかなり便化しており、第三段階とされた蛸文が描かれている Knossos 宮殿西翼倉庫地区出土の三把手付壺に見られる巻貝文との比較からして、型式上この壺を蛸文第二段階とすることは困難である。三方向に拡がる海草文と枝状の岩文は蛸文第三段階とされた Basel 考古博物館所蔵の鏡壺 (図版4-1) に各々同様な例が見られる。この壺も蛸文第三段階相当に位置づけられよう。

以上の三例の様なもの以外には、Furumark が sea anemone (FM27) と呼ぶ小円形の文様を介して文様が並べられるもの (以下、仮にこれをA型と呼ぶ) と、上下向き合わせて描かれた tri-curved rock-work の区切る空間に文様が入られるもの (以下、B型と呼ぶ) が交互様式として一般的なものである。sacral knot と sea anemone が交互に描かれた Gournia 出土例 (図14-c) はA型の交互様式の典型的なものであろう。画面上部の装飾帯は図12-e の例と比べられる。sacral knot と sea anemone が交互に描かれる他の交互様式の土器の装飾帯を見ても、同じく、いずれも先に蛸文第三段階とされた土器の装飾帯について観察された特徴が見られる (図15-b, c, d 参照)。図15-b は、Hagia Triada 出土の水差 (C3936: 図版6-1) に見られるもので、図12-n と比較されよう。図15-c は、キテラ島 Kastri 出土の水差 (p34) に見られるもので、本来同じ方向に向き合う形で描かれるべきものと思われる頸部くびれ部両側の葉文帯 (図12-a, b 参照) が逆向きになっている点は、頸部くびれ部直下のアダーマークと併せて、装飾帯として葉文帯を描く際の当初の約束が忘れられた結果とも解釈出来、注意される (逆向きの葉文帯は、蛸文第三段階相当とされたメロス島 Phylakopi 出土のアラバストロンにも見られる; 図12-f 参照)。

図15-d は、Palaikastro 出土の把手付杯に見られるもので図12-l の例と比較される。海綿文が帯の内側に描かれる表現は、同じ表現がクレタ島 Katsamba 出土の三把手付壺に描かれた兜にも見られる (図16)。この兜には LM III A 期のジグザグ文と比較されるものも描かれていることは注意されよう (図11-c 参照)。A型の交互様式には sacral knot 以外にも様々な文様が用いられるが、図17-a, b はそのうち二例を示す。図17-



図16 三把手付壺に描かれた兜 (部分、実際は横向き) (Demargne, 1964, fig. 210)

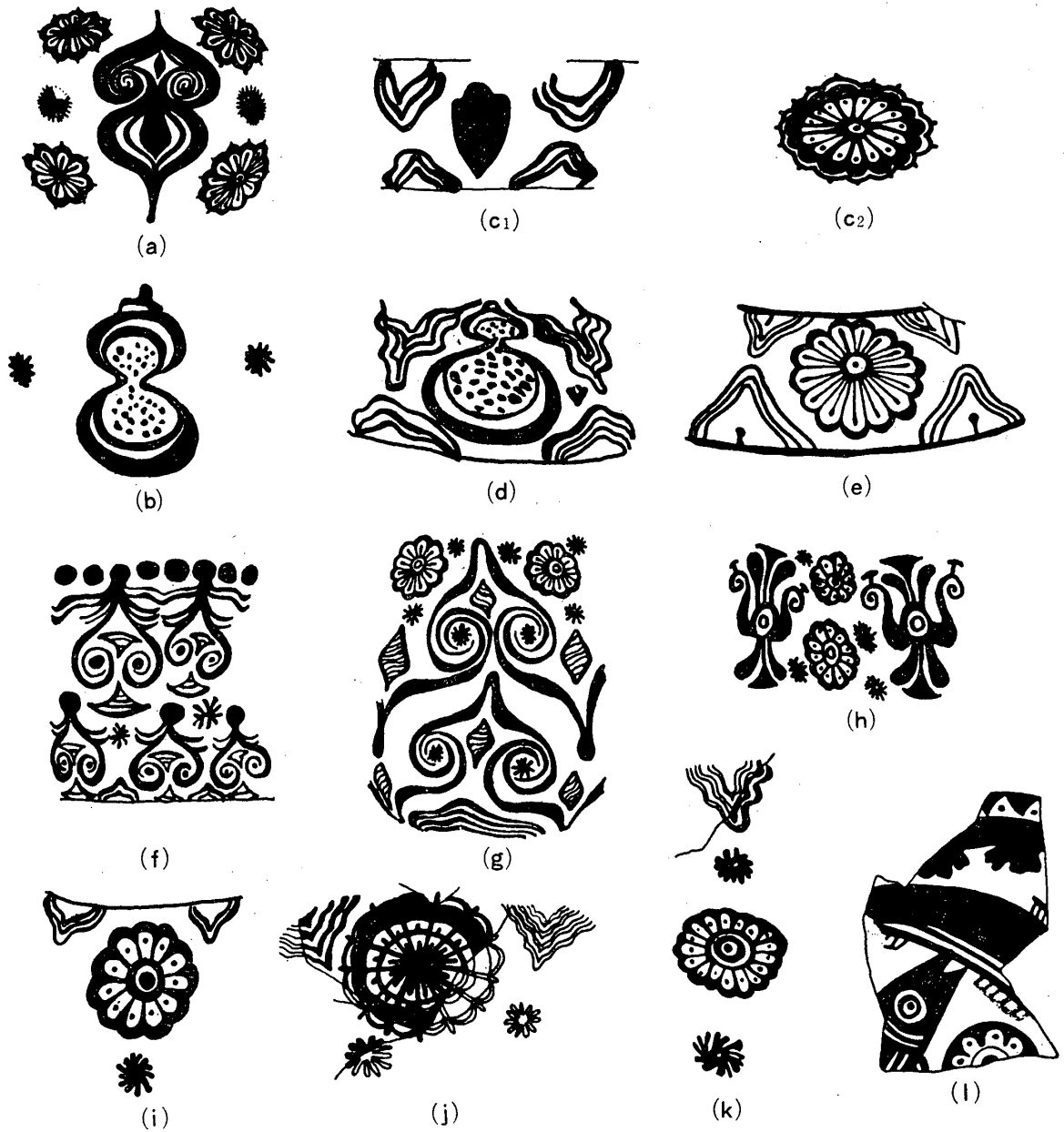


図17 交互様式とその関連の文様（1を除く）

- |  |   |
|--|---|
| (a) Postcard of Museum of Nauplion.      | (b) Buchholtz & Karageorghis, 1973, 309, Pl. 903. |
| (c) Popham & Sackett, 1970, Pl. 57, b-c  | (d) Buchholtz & Karageorghis, 1973, 320, 946.     |
| (e) Blegen, 1937, fig. 665, left (1034). | (f) Marinatos & Hirmer, fig. 84, below.           |
| (g) Halbhell et al., 1980, fig. 60.      | (h) Bosanquet, 1904, Pl. 11.                      |
| (i) Evans, 1935, 283, fig. 217.          | (j) Wace et al., 1921, Pl. 52b.                   |
| (k) Caskey, 1963, Pl. 53b.               | (l) Popham, 1970, 102, fig. 8, upper.             |

a はミュケナイ第 518 号墓から出土した、頸部が海綿文で装飾された水差の胴部に描かれているもので、蔦の葉文とパピルス文の大きく膨んだ基部？ とが組合わされた形の文様（全体で 8 の字形盾に近い形となっている）が使われている。sea anemone の上下に円花文が描かれ、縦方向にも

交互性が認められる点が特徴的である。図17—bに見られる8の字形盾が描かれた例には、キュテラ島の Kastri, ケオス島の Hagia Irini, ギリシア本土の Vari, パレスチナの Gezer から出土例がある。Vari 出土例は、前述の Kastri 出土の  $\nu$  34 の水差と同じく、脚部は arcade pattern (二重渦巻文と組合うものと同じもの) で装飾されている<sup>22)</sup>。図17—a, bはいずれも蛸文第三段階相当と考えて良いだろう。

図17—c～eはB型とした交互様式の例である。tricurved rock-work は先に蛸文第三段階の特徴と考えられたが、これらの例に見られるその用いられ方はこれ迄見た中でも様式化している様に見える。図17—cは Palaikastro 出土の注口付浅鉢 (NP53) に描かれているものである。tricurved rock-work の作る空間に入れられた文様は交互様式にしばしば用いられるもので、巻貝というよりクロッカスとされている植物文の特に便化したものであろう<sup>23)</sup>。この浅鉢の内面中央に描かれた円花文 (図17—c<sub>2</sub>) の花卉先端の小突起は、図17—a の円花文にも見られる<sup>24)</sup>。図17—dはエウボイア島の Chalkis 出土の鏡壺に描かれた例である。図17—bの8の字形盾と同じ文様が描かれており、この点からも蛸文第三段階に位置づけられよう。この例ではアーチ形と呼ばれる岩文が tricurved rock-work と向き合わせに描かれ、両者の同時期性を示している (星形文と双斧文が描かれ、先に蛸文第三段階とされたリュトンにはアーチ形の岩文が見られる; 図10—c 参照)。8の字形盾が描かれたB型の交互様式は Knossos の「王の道」の北側の発掘でも出土している (Popham 1976, Pl. 81e)。図17—eは、ギリシア本土 Prosymna の第44号墓出土の注口土器に描かれている例で、Coldstream はこれについて言及していないが、B型の交互様式と認められ、その年代もこれ迄見てきた例と同じく蛸文第三段階と考えられる。Zakros 出土の土器片 (BM A707<sub>1</sub>) には、図17—eの tricurved rock-work に、上下に向き合う“しゅろ文” (FM14) が置き換わった形の図柄が見られる (Forsdyke 1925, 114, fig. 148)。Coldstream は Zakros 出土土器に交互様式の例を認めていないが、これについても交互様式として良いと思われる。エジプトの Sakkara 出土のアラバストロンでは、円花文左右の上半部には tricurved rock-work が描かれているが、下半部にはしゅろ文が描かれている (Furumark 1950, 211, fig. 19. K)。交互様式とは呼べないにしても、BM A707<sub>1</sub> に見られる例と共に、図17—eの例と同時期として良いだろう。

図17—f～kは厳密には交互様式と呼べないが、それと近い関連が認められるものである。hは先述の蛸文第三段階とされた Vapheio 出土の両把手付壺に見られるもので (図9 参照), sea anemone が空間を埋める様に入れられている点を除けば交互様式と呼べるものである。h以外はいずれも tricurved rock-work 或いはアーチ形岩文が描かれている。fは Pseira 出土の壺に描かれているもので、共存する装飾帯は、先述の Gournia 出土の交互様式の注口土器他に見られるものと同じである。ハート形の蕨の葉文の基部から左右に髭状に伸びる短線は特徴的であるが、同様な蕨の葉文はミュケナイ出土の三把手付壺 (Bosanquet 1904, Pl. 13; Evans 1935, 282, fig. 216.) 或いは Phylakopi 出土の土器片 (Atkinson et al., 1904, Pl. 31, 3.) にも見られる。gは Hagia Triada 出土のアラバストロン (C3000) に見られるもので、円花文の左右の空間に sea anemone が入れ

られている点でhと良く類似しており、又、共存する装飾帯は、同じ Hagia Triada 出土の先述の交互様式の水差 (C3936, 図15—b, 図版6—1) の装飾帯と同じである。iは Palaikastro 出土の水差 (図版6—2) に描かれた渦巻形葉文帯の区切る空間に見られるもので、充填文的に使われたその性格は、f, g, h, 各々に見られる *tricurved rock-work*, *sea anemone*, 円花文にも共通するものである。又、この水差の器形は、先に蛸文第三段階とされたケオス島の Hagia Irini 出土の水差 (図版4—4) と比べられよう。jはミュケナイの「アイギストスの墓」と呼ばれるトロス墓出土の注口付浅鉢に描かれているものである。アーチ形岩文と交互に描かれた円花文は大きく、eに見られるものに近いが、又、花卉に小突起を持つ点では、aとcの円花文とも共通している。kはケオス島 Hagia Irini 出土のアラバストロンに描かれているもので、円花文と *sea anemone* の配置はaに見られる例と比べられよう。この両側には縦方向に波打つ葉文帯が描かれており、jと共に交互様式と呼べなくはないものである。円花文は花卉の枚数が多く複雑であり、C<sub>2</sub>の円花文と比較される。

以上、17図のfからkについて検討したがいずれも蛸文第三段階に位置づけることが出来、所謂交互様式との間に明瞭な時期差を認めることは困難である。FurumarkによりLM III A<sub>1</sub>期に位置づけられた (Furumark 1941b, 104) Isopata 第二号墓出土の水差 (Evans 1913, 47, fig. 62.) に描かれた装飾性の強い大きな円花文が、その変遷の一つの方向を示すものであれば、jに見られる様な円花文は蛸文第三段階でも比較的遅く出現したと推測することは不可能ではないだろう。ここで、花卉の枚数を増やすなどして装飾性を高めた円花文が、より様式化した、或いは整理された文様配置をとる交互様式に見られることも注意される。これ迄に見てきた蛸文第三段階とされた土器には、Knossos 宮殿南正面出土の鏡壺 (図7—b) を始め、文様各部に古い要素を比較的多く残すものも含まれるが、もし蛸文第三段階が更に細分されるならば、交互様式と並存する蛸文付土器はKnossos 宮殿西翼倉庫地区出土の三把手付壺 (図7—a) であろう。いずれにしても、交互様式が蛸文第三段階に位置することは確かと思われる。

蛸文第三段階とされた土器とLM III A期とされた土器との近似については、これ迄度々注意されたが、交互様式についても同様のことが言える。例えば、外面にLM III A期の花文様 (Popham 1970, 102, fig. 8-3) が描かれているKnossos 宮殿北西住居跡出土の浅鉢には内面に円花文 (図17—1) が描かれているが、これは、17図—kに見られる円花文に直接由来するものと思われる。又、上述のIsopata 第二号墓出土の水差には、百合文とパピルス文が組合わされた文様と円花文が交互に描かれており、交互様式と変わらないのである。

### 13 結 語

小論では、古くから疑問視されるLM II期の編年上の有効性を検討する為、まずLM I B期とLM II期に分類されている蛸文について詳細に検討した。その結果、その変遷過程に四段階を認めたと、FurumarkがLM I B期後半とした蛸文は第一、第二段階に位置づけられるものであった。

Furumark が LM Ⅱ A 期として挙げた土器はいずれも 第三段階とされた蛸文が描かれたものであり、蛸文について見ると、Evans と Furumark により同時期性が主張された LM Ⅰ B 期後半と LM Ⅱ A 期は時期的に連続すると考えられる。次に、蛸文第三段階相当に位置づけられる土器を追求したが、C 型として区別される海棲生物文を持つ土器と、交互様式と呼ばれる様式化した特徴的な文様配置を持つ土器がこの段階に位置づけられた。又、ジグザグ文、二重渦巻文の様な器表面を覆う幾何学文もこの段階に盛行したと考えられる。

LM Ⅱ 期を代表すると考えられた三把手付壺には、第一段階に位置づけ得る蛸文が描かれた例があるので、三把手付壺は蛸文第三段階以前に出現していたと考えられる。一方、LM Ⅱ 期を代表すると考えられたもう一つの器種であるエピュラ式杯については、後述の近年出土の海棲生物文が描かれたものも含めて、蛸文第三段階より古く位置づけ得る例は見られず、この段階に出現したものと思われる。

この様に、蛸文第三段階には、それ迄に見られなかった新しい器種、文様、文様の配置、文様の組み合わせが見られ、この段階を LM Ⅰ 期と区別して LM Ⅱ 期と呼ぶことは充分可能である。しかし一方、画面を区切る装飾帯や海棲生物文周囲の表現、画面の構成、等から見て蛸文第二段階より様式化が進んではいるが、描かれた海棲生物文は蛸文第三段階のものともあまり変わらないという土器もこの段階に並存していたと考えられる。これらの土器を従来通り LM Ⅰ B 期のものとするならば、LM Ⅱ 期は蛸文第四段階ということになる。しかしその場合個々の文様について Furumark の設定した LM Ⅲ A<sub>1</sub> 期の文様との区別が新たに困難な問題となろうし、又、LM Ⅱ 期の指標としてのエピュラ式杯の有効性も失われるだろう。以上の点を考慮し、なおあくまで LM Ⅰ B 期に後続し且つ LM Ⅲ A<sub>1</sub> 期に先行する一時期として LM Ⅱ 期を考えようとするならば、LM Ⅰ B 期の範囲を蛸文第二段階迄に厳密に限定し、蛸文第三段階に新しく見られる土器型式の発展を重視して、従来 LM Ⅰ B 期とされた土器をも含む (Furumark はこれらを LM Ⅰ B 後半として LM Ⅱ A と同時期とした) 蛸文第三段階を LM Ⅱ 期として改めて定義し直すことが必要であろう。これが LM Ⅱ 期の問題に対する小論の一つの結論である。

さて、小論で行ったマリノ・スタイルの土器の検討から、吸盤の形に明らかに便化が認められる C 型海棲生物文のみならず B 型の海棲生物文も蛸文第三段階迄存続したと考えられる。筆者によれば、Mountjoy が言う様な吸盤の形による海棲生物文の分類は副次的文様の多寡によるものと同様、編年上常に有効とは思われないのであり、海棲生物付土器の編年的位置づけは文様各部分の詳細な観察に基づき総合的に判断して行う必要がある。この点に関係して、これ迄に述べられたマリノ・スタイルの土器の変遷に対する考えを裏づけられる、Knossos の「王の道」の北側の発掘で出土した蛸文付四把手付壺 (図版 6—3, 同じく、Hood 1962, 28, fig. 36 参照) について述べておきたい。この発掘は“Knossos に於いて初めて LM Ⅰ B 期の純粋な崩壊層を明らかにした”とされる点で重要視されているものだが、この四把手付壺と共に、先に蛸文第三段階相当とされた二重渦巻文付注口土器が同じ崩壊層から出土している (出土した地点は明らかにされていないが同

じ発掘では交互様式の土器も出土している；Coldstream 1978, 397, fig. 9)。

この四把手付壺に描かれた蛸文は、壺の下部が欠損している為、十分な観察は行なえないが、所謂A型の蛸文であり、吸盤の形態だけからは古い段階の蛸文の様に見える。しかし、波打ち方の非常に弱い硬直した足が頭部から放射状に拡がっている点、吸盤が全て各足の右側に時計回りに付けられている点（蛸文第三段階相当とされた Palaikastro 出土リュトン（C3384）のC型蛸文が想起される；図3—a参照）、そしてLM III期の蛸文の胴体を想わせる極度にくびれた胴体、等は先に見た第二段階の蛸文のいずれにも見られないものである。この様にこの蛸文は、吸盤の形態からは蛸文第一段階以来のA型に分類されるが、第二段階の蛸文より更に進んだと見られる形態的特徴を持つ。これ迄に見た例では、蛸文第二段階にA型蛸文の例があり、蛸文第三段階に見られる蛸文第二段階の型態的特徴を残す海棲生物文の例を考えれば、この四把手付壺も同じ崩壊層出土の先述の注口土器と同じく蛸文第三段階に位置づけることは充分可能と思われる。更に、この蛸文周囲に描かれた副次的文様を詳細に観察し類例を求めると、この壺に見られるものと殆んど全く同じと言って良い巻貝文と岩文が、Knossosの「Unexplored Mansion」と名付けられた住居址出土の、吸盤を持たないC型のカイダコ文が描かれた、これ迄にも何度か触れられた問題のエピュラ式杯（図版6—4）に描かれていることに気づく。興味深いことに、この岩文の形態は先に蛸文第二段階に出現したとされた三葉形、或いは四葉形岩文の“裏返し”の形である。この様な岩文は、蛸文第二段階相当と考えられる土器には筆者の知る限り見られないのであり、この形態の岩文は恐らく蛸文第三段階になって出現したと推測出来る。「Unexplored Mansion」の発掘者である Popham は、この杯の編年上の位置について、慎重にLM I B期である可能性もあるとしながらも、この杯が“典型的なLM II期の杯”と同じ層から出土したことを挙げ（星形文と巻貝文の描かれた壺も出土している）、器形を文様に優先させてこのエピュラ式杯をLM II期に位置づけ、LM II期になおLM I B期の様式で描き続けた画工がいたとしてこの杯に描かれた文様を説明している（Popham 1978, 181-2）。しかし上述した様に、文様の型式的検討からも、このPophamの議論とは別に、このエピュラ式杯の年代はLM II期と改めて定義された蛸文第三段階相当と考えられるのである。この様に、筆者の考えるこの杯の年代は結果的にPophamの与えた年代と一致したが、このエピュラ式杯をLM II期とした結果は、恐らくPophamの考える以上に重大である<sup>25)</sup>。即ち筆者によれば、現在一般にLM I B期とされている多くの土器がこれと同時期（=蛸文第三段階）と考えられるのであり、LM II期の土器について固定的に描かれてきた旧来のイメージは大きく変更を余儀なくされるであろうからである。

最後に、クレタ島の諸遺跡の大規模な崩壊の問題について、見解を異にするS. HoodとJ. N. Coldstreamの議論を見ながら若干の考察を加えたい。両者はこの崩壊の年代をLM I B期と見る点では一致しているが、Hoodは、テラ島の噴火の年代をLM I A期として、クレタ島の諸遺跡の崩壊の状況から、これらをクレタ島以外の勢力（ギリシア本土の勢力が想定されている）によって起された戦争によるものとしており（Hood 1971b, 1978）、一方、Coldstreamは、テラ島の



噴火の年代を LM I B 期半ば頃として、これをクレタ島諸遺跡の崩壊の原因とし、ギリシア本土勢力の侵略説に対して次の様に反論した。即ちクレタ島の諸遺跡の崩壊をギリシア本土の勢力の侵略に帰因させる仮説からは、ギリシア本土と約 20km しか離れていない、クレタ島人の交易上の拠点と考えられるキュテラ島の Kastri 遺跡が、何故見逃されてクレタ島の諸遺跡より一世代程長く繁栄しながら生き延びたのか説明が困難であるというのである (Coldstream 1978)。Coldstream のこの議論は、Coldstream が LM I B 期の最終段階に位置づけた交互様式の土器が、Kastri からまとまって出土するのに対し、クレタ島の LM I B 期半ば頃に崩壊したとされた諸遺跡からは殆んど出土していないことに基づいたものである。ギリシア本土勢力侵略説を採る側からのこの議論に対する反論は、筆者の知る限り見られない。しかし、交互様式の土器は Coldstream も認めている様にクレタ島の諸遺跡からも出土しており (Coldstream は、これらを交互様式の土器の流通初期のものとして説明している; Warren 1973, 322 参照), 更に筆者によれば、これと同時期のもの、即ち蝸文第三段階相当と考えられる土器をこれらの遺跡出土の土器に指摘することは容易である。従って、規模の大小はさておき、キュテラ島の Kastri, ケオス島の Hagia Irini, そして、クレタ島の Chania 及び Knossos の崩壊の年代と、クレタ島東部と中部及び南部の諸遺跡の崩壊の年代との間に Coldstream の言う一世代のギャップを認めることは難しく、いずれも小論で詳しくその内容を検討し改めて定義した LM II 期 (= 蝸文第三段階) に相継いで崩壊<sup>26)</sup>したと推測されるのである。

クレタ島に於けるエピュラ式杯はパレス・スタイルと共に、ギリシア本土の文化の伸張を考える上での論拠と一般にされているが、その出現は蝸文第三段階と考えられる。しかし、これから想像されるのとは反対に、交互様式の土器の分布の拡がりから Coldstream は当時のミノス文化の拡大を示唆している。又、この段階の少なくとも初期には LM I B 期の土器の古い伝統がなお強く存続していると考えられる。この様に、クレタ島全域に於ける諸遺跡がほぼ同時的に崩壊した時期のクレタ島とギリシア本土の文化の影響関係には図式的に簡単に説明のつかない問題が残されていると言えよう。蝸文第三段階、或いは蝸文第四段階相当のクレタ島の土器とギリシア本土の土器との影響関係について、問題となる土器群を詳細に検討し、位置づけ、比較する努力が今後更に必要と思われる。

小論を纏めるにあたって友部直先生には貴重な文献について御世話になりました。又、中村るいさんからも御教示と御助力を賜りました。末尾ながら記してお礼申し上げます。

## 註

- 1) LM I 期の亜区分の表記法として、Evans は a, b の小文字を用いるが、小論では現在一般に用いられている大文字による表記法に統一する。Evans の LM II 期の亜区分についても同じ。
- 2) LM II 期と LM III A<sub>1</sub> 期の土器の関係については、小論でも必要に応じて触れるが、詳しくは改めて別に論じる予定である。

- 3) Knossos 宮殿の最終的崩壊の年代の問題は A. Palmer の指摘以来大きな争点となっており、現在、Popham の主張する LM III A:2 初頭が一般に受け入れられつつある様である。しかし最近、この問題を改めて詳しく論じた E. Hallager は LM III B 期説を出すなど (Hallager 1977)、今日、この問題は解決困難な問題として残されている。ギリシア語の古形として解読された Knossos 宮殿出土の線文字 B 粘土板はこの最終的崩壊時の火災で遺されたものであり、この線文字 B の粘土板が、一般に LM II 期とされるパレス・スタイルにギリシア本土の影響を認める議論の確実な論拠となりうるかは疑問である。
- 4) Furumark は後年、前1470年頃とした Thera 島の噴火直後、ミュケナイ人によりクレタ島が征服されたという見解を發表している (Furumark 1978, 670)。
- 5) 百合文の雄蕊の芯部に、本来薬を表わしたと思われる多数の短線が付けられた例、或いは、吸盤を持たないカイダコ文は、全て、LH II B 期以降とされている (Furumark 1941, 258, fig. 32; 307, fig. 50 参照)。
- 6) Evans は宮殿南西隅としている (Evans 1935, 280)。Knossos 宮殿出土土器の出土地点については、小論では Popham の記述に従う (Popham 1970, Pl. 4)。
- 7) 十分に絡み合った足とはどのような状態を指すのか意味不明。
- 8) 同様のリュトン C3393, C3394, BM A 650 が同じく Palaikastro から出土している。
- 9) C3392 のリュトンと Isopata の「王墓」出土の三把手付壺で問題とされた蛸文の特徴的な形態の足は、Palaikastro 出土フラスコ形土器の胴体左側第3の足の形態と比較出来る。この胴体左側の第3の足が、ひとつは何らかの理由で第1の足が描かれなくなった為 (Zakros 出土の罍壺参照)、又、ひとつは第2と第3の足が取り違えられた為に、胴体左側の第1の足として描かれる様になったと推論することも可能かもしれない。
- 10) Furumark は B 型蛸文をギリシア本土に特徴的とした (Furumark 1950, 157)。
- 11) Gournia 出土の罍壺や、Zakros 宮殿祠堂出土の三把手付壺には簡単な形の岩文も見られ、この点からこれらの土器を第二段階に位置づけることは不可能でないかも知れない。しかし、これらの土器には第二段階とされるものに比べ副次的文様が多用され、第二段階に普通に見られる三葉形岩文も見られない点を考え、ここでは、第一段階に既に便化した岩文が一部で出現していたと考えておきたい。
- 12) Popham はこの罍壺を、第一段階とした Palaikastro 出土のフラスコ形土器、及び Gournia 出土の罍壺と同時期のものと考えている (Popham 1970, 216)。
- 13) 先に第一段階とした Knossos 宮殿南正面出土の三把手付壺に縦に描かれた蛸文にも、ある程度の左右対称性が見られる。この蛸文は同じ段階とした Palaikastro 出土のフラスコ型土器より若干新しいものかも知れないが、しかしこの蛸文の波打つ左右の足の見せる対称性は、第三段階の蛸文の左右対称性とは性格が大きく異なると思われ、左右対称性という大雑把な概念で直接両者を比べることは出来ないだろう。
- 14) LM III A:1 期とされる「双斧の墓」出土の三把手付壺に描かれた蛸文には10本の足が数えられる。
- 15) 先述の LM III A:1 期とされている「双斧の墓」出土の三把手付壺も、この段階に位置づけられる可能性が大きい、これについては同様な他の三把手付壺と共に稿を改めて論じたい。
- 16) 塗りつぶされた岩文の中央に小円が塗り残され、その中心に小円又は点が入れている。
- 17) この点では Tyllissos 出土の三把手付壺 (Evans 1935, 286, fig. 220) が比べられる。
- 18) Phylakopi 出土の同様なアラバストロンの例がある (Renflew 1978, 408, fig. 1)。
- 19) 蛸文第三段階と考えられる Pseira 出土の海豚文付リュトン (図版 5-4) と Knossos 出土のアラバストロン (Tricurved rock-work が描かれている) には、この岩文と近いものが見られる (Warren 1981, 159, fig. 8 参照)。
- 20) ジグザグ帯は三本の平行線による。同様なジグザグ帯の例は Kastri の堆積中に見られる (Coldstream & Huxley 1972, Pl. 40, § 128)。
- 21) LM I B 期とされるジグザグ帯の凹部には普通突起が付けられているが、この例には見られない。
- 22) 各々、Kastri: (Coldstream & Huxley 1972, fig. 96.  $\omega$  161,  $\omega$  227-9), Hagia Irini: (Caskey 1962, Pl. 96a), Vari: (Buchholtz & Karageorghis 1973, 309, 903a, b), Gezer: (Furumark 1950, 211, fig.

- 19E.), 参照。A型の交互様式にはこの他に、植物文と組合う例が知られる (Coldstream & Huxley, op. cit., fig. 96, §. 81他)。
- 23) Popham は “Shell” と呼んでいる (Popham 1970, 217)。クロッカス文とこの文様の組み合わせによる交互様式の例がある (Coldstream & Huxley, op. cit., fig. 96, μ 8-9)。
- 24) この花卉先端に見られる小突起は、恐らく三葉形岩文周囲の小突起に由来するものと思われ、本来の意味が失なわれ、単に装飾の目的で加えられたと見られる (Evans 1935, 278, fig. 213参照)。
- 25) Popham は、海棲生物文が描かれた幾つかの大型のアンフォラ (三把手付壺) も又、LMⅡ/LHⅡB期に作られた可能性もあるとしている (Popham 1978, 182, n. 14.)。恐らく図版1-4に示された壺が考えられていると推測されるがこれについては先に述べた理由で賛成出来ない (p. 175 参照)。注意されるべきは、むしろこのエピュラ式杯と同時期の、三把手付壺以外の器種であろう。
- 26) ここでいう “崩壊” は最終的なものではないことを念の為おことわりしておきたい。

### 略 語

AA : Archäologischer Anzeiger.

AJA : American Journal of Archaeology.

AR : Arcaeological Report.

ASAtene : Annuario della Scuola Archaeologica di Atene.

BCH : Bulletin de Correspondance Hellénique.

BSA : Annual of the British School at Athens.

CAH : Cambridge Ancient History.

FM : Furumark Motif Number.

JHS : Journal of Hellenic Studies.

Thera Congress I : A. Kaloyeropoulou (ed.), Acta of the First International Scientific Congress on the Volcano of Thera (1971), Athens.

Thera Congress II : C. Doumas (ed.), Thera and the Aegean World, Vols. I and II (1978, 1980), London.

### Bibliography

Atkinson, T. D., et al.

1904 Excavations at Phylakopi in Melos. London.

馬場 恵二

1976 ミノア文明崩壊に関する「自然災害説」の再検討—アクロティリ遺跡およびザクロス宮殿の発掘をめぐって—駿台史学38, pp. 26-66.

Barber, R. L. N.

1981 “The Late Cycladic Period: A Review”. BSA 76, pp. 1-70.

Benzi, M.

1975 Ceramica micenea in Attica. Milano.

Betancourt, P. P.

1973 “The Polyp Workshop: A Stylistic Group from LMIB”. AJA 77, pp. 333-4.

1977 “Marine-Life Pottery from the Aegean”. Archaeology, pp. 38-43.

Blegen, C. W.

1921 Korakou. Boston.

土居通正

- 1937 Prosymna. Cambridge.
- Bosanquet, R. C.  
1904 "Some 'Late Minoan' vases found in Greece". JHS 24, pp. 317-29.
- Bossert, H. Th.  
1921 Alt Kreta. Kunst und Kunstgewerbe in Ägäischen Kulturkreise. Berlin.
- Boyd-Hawes, H.  
1908 Gournia. Philadelphia.
- Buchholtz, H. G., and Karageorghis, V.  
1973 Prehistoric Greece and Cyprus. London.
- Caskey, J. L.  
1962 "Excavations in Keos, 1960-61". Hesperia 31, pp. 263-83.  
1964 "Excavations in Keos, 1963". Hesperid 33, pp. 314-35.  
1972 "Investigations in Keos, Part II : a conspectus of the Pottery". Hesperia 41, pp. 357-401.
- Coldstream, J. N., and Huxley, G. L. (eds.)  
1972 Kythera. Excavations and Studies. London.
- Coldstream, J. N.  
1978 Kythera and the Southern Peloponese in the LM I Period". in Thera Congress II, pp. 389-401.
- Davaras, C.  
Hagios Nicolaos Museum.
- Daux, G.  
1962 "Chronique des Fouilles 1961", BCH 86, pp. 629-974.
- Dawkins, R. M.  
1903 "Excavations at Palaikastro II". BSA 9, pp. 290-328.
- Demargne, P.  
1966 La Naissance d'Art Grec (L'Univers des Formes). Paris.
- Evans, A.  
1913 The Tomb of the Double Axes and Associated Group, and the Pillar Rooms and Ritual Vessels of the "Little Palace" at Knossos. Archaeologia 65.  
1928 The Palace of Minos at Knossos. Vol II. London.  
1935 The Palace of Minos at Knossos. Vol IV. London.
- Forsdyke, E. J.  
1925 Catalogue of the Greek and Etruscan Vases in the British Museum. Vol. i; part I; Prehistoric Aegean Pottery.
- Furumark, A.  
1941a The Mycenaean Pottery, Analysis and Classification. Stockholm.  
1941b The Chronology of Mycenaean Pottery. Stockholm.  
1950 "The Settlement at Ialysos and Aegean History c. 1550-1400 B. C.", Opuscula Archaeologica 6, pp. 150-271.  
1978 "The Thera Catastrophe - consequences for European Civilization". in Thera Congress II pp. 667-74.
- Hallager, E.  
1977 The Mycenaean Palace at Knossos. Evidence for Final Destruction in the IIIB period. Me-

- delhavsmuseet Memoir I.
- Hägg, R.  
1982 "On the Nature of the Minoan influence in early Mycenaean Messenia". *Opuscula Atheniensia* 14-4, pp.27-37.
- Halbherr, F., Stefani, E., Banti, L.  
1980 "Haghia Triada nel Periodo Tardo Palaziale", *ASAtenè.* 55, pp.1-288.
- Higgins, R. A.  
1967 *Minoan and Mycenaean Art.* London.
- Hood, S. and Jong, P. de.  
1952 "Late Minoan Warrior-Graves from Ayos Ioannis and the New Hospital Site at Knossos", *BSA* 47, pp.243-77.
- Hood, S.  
1962 *JHS Archaeological Report 1961-62.* pp.25-7.  
1971a *The Minoan.* London.  
1971b "Late Bronze Age Destruction at Knossos". in *Thera Congres I*, pp.373-83.  
1978a "Traces of the Eruption outside Thera". in *Thera Congress II*, pp.681-90,  
1978b *The Arts in Prehistoric Greece.* Harmondsworth.
- Hood, S., Huxley, G., Sandars, N.  
1959 "A Minoan Cemetery on upper Gypsades". *BSA* 53/54, pp.194-262.
- Hutchinson, R. W.  
1962 *Prehistoric Crete.* Harmondsworth.
- Levi, D.  
1959 "La Villa Rurale Minoica di Gortina". *Bolletino d'Arte* 44, pp.237-265.
- Luce, J. V.  
1969 *The End of Atlantis.* London.
- Marinatos, S. N.  
1939 "The Volcanic Destruction of Minoan Crete". *Antiquity* 13, pp.425-39.
- Marinatos, S. and Hirmer, M.  
1960 *Crete and Mycenae.* London.
- Matz, F.  
1973 "The Zenith of Minoan Civilization", *CAH*, 2/1, 3rd ed., pp.557-81.
- Mountjoy, P. -A.  
1972 "A Late Minoan IB Marine Style". *BSA* 67, pp.125-8.  
1974 "A Later Development in the Late Minoan IB Marine Style". *BSA* 69, pp.177-80.  
1974 "A Note on the LM IB Marine Style". *BSA* 69, pp.172-5.  
1977 "Attribution in the LM IB Marine Style". *AJA* 81, pp.557-60.
- Mountjoy, P. -A.; Jones, R. E.; Cherry, J. F.  
1978 "Provenance Studies of the LM IB/LHIIA Marine Style". *BSA* 73, pp.143-71.
- Müller, K.  
1909 "Alt-Pylos II". *Mitteilungen des Deutschen Arcaologischen Instituts (Athenische Abteilung)* 34, pp.269-328.
- Müssche, H. F. (ed.)  
1971 *Thorikos V.* Brussels.
- Niemeir, W. D.

土 居 通 正

- 1979 "Toward a New Definition of Late Minoan II". *AJA* 83, pp. 212-4.
- Nilsson, M. P.  
1950 *The Minoan-Mycenaean Religion and its Survival in Greek Religion* (2nd ed.). Lund.
- Pendlebury, J. D. S.  
1939 *The Archaeology of Crete*. London.
- Platon, N.  
1968 *Kreta*. Munich.  
1971 *Zakros. The Discovery of a Lost Palace of Ancient Crete*. New York.
- Popham, M. R.  
1964 "The Palace at Knossos: A Matter of Definition and a Question of Fact". *AJA* 68, pp. 349-54.  
1967 "Late Minoan Pottery, A Summary". *BSA* 62, pp. 337-51.  
1969 "The Late Minoan Goblet and Kylix". *BSA* 64, pp. 299-304.  
1970 "The Destruction of the Palace at Knossos: Pottery of the Late Minoan IIIA Period". *Studies in Mediterranean Archaeology* Vol. 12.  
1973 "The Unexplored Mansion at Knossos: A Preliminary Report on the Excavation from 1967 to 1972". *JHS-AR* 1972-73, pp. 50-61.  
1975 "Late Minoan II Crete: A Note". *AJA* 79, pp. 372-4.  
1978 "Notes from Knossos, Part II". *BSA* 73, pp. 179-87.  
1980 "Cretan sites occupied between c. 1450 and 1400 B. C.". *BSA* 75, pp. 163-7.
- Popham, M. R. and Sackett, L. H.  
1970 "Excavation at Palaikastro". *BSA* 65, pp. 203-42.
- Renflew, A. C.  
1978 "Phylakopi and the L. B. A.". in *Thera Congress II* pp. 403-19.
- Schachermeyr, F.  
1962 "Forschungsbericht über die Ausgrabungen und Neufunde zur ägäischen Frühzeit 1957-1960". *AA* 1962, pp. 105-382.  
1976 *Die Ägäische Frühzeit. 2. Band. Die Mykenische Zeit und die Gestung von Thera*. Wien.
- Schefold, K.  
1958 "Die Bedeutung der Kretischen Meerbilder". *Antike Kunst* 1, pp. 3-5.
- Vermeule, E.  
1963 "The Fall at Knossos and the Palace Style". *AJA* 67, pp. 195-9.  
1964 *Greece in the Bronze Age*. Chicago.
- Wace, A. J. B.  
1932 "Chamber Tombs at Mycenae". *Archaeologia* 82, 1932.  
1936 "A New Mycenaean Beehive Tomb". *Illustrated London News*. Feb. 15. 1936 pp. 276-9.  
1956 "Mycenae 1939-1955, part II. Ephyraean Ware". *BSA* 51, pp. 123-7.  
1973 "Foreword to Ventris and Chadwick" in *Documents in Mycenaean Greek*, second edition, Cambridge.
- Wace, A. J. B. et. al.  
1921 "Excavations at Mycenae". *BSA* 25, pp. 1-434.
- Warren, P.  
1973 "Review of Coldstream and Huxley (1972)". *Antiquity* 42, pp. 321-3.  
1981 "Minoan Crete and ecstatic religion. Preliminary observations on the 1979 excavations at

ミノス後期Ⅱ期の問題

Knossos in Sanctuaries and Cults in the Aegean Bronze Age. pp.155-66. Stockholm.  
Watrous, L. V.

1981 "The Relationship of Late Minoan II to Late Minoan IIIA:1". AJA 85, pp.75-7.

## The Problem of the Late Minoan II Period

—A Reconsideration of the so-called Late Minoan IB Pottery\*—

Michimasa Doi

The Palace Style three-handled jar and the Ephyraean goblet have been considered two indexes of the LM II period ever since Evans established LM II as a distinct chronological period. Following Evans, Furumark noted a new style among pre-destruction pottery and postulated an LM IIIA:1 period. His chronological framework, LM IB, LM II, LM IIIA:1, has been generally accepted, but opinions have also been expressed denying the chronological validity of LM II and maintaining the contemporaneity of LM IB and LM II, and/or LM II and LM IIIA:1. To deal with LM II is a delicate matter which will probably affect the problem of the so-called LM IB Minoan destructions, and which, as Popham has said, deserves a detailed study.

In this article, I shall reconsider the problem of the LM II period and attempt to re-define LM II pottery, with an eye to countering the objections to Furumark's chronological framework. Ideally, a study of this kind would require dealing with the typological relation of LM II pottery to both LM IB and LM IIIA:1 pottery, but in this article, owing to limited space, discussion will have to be confined mainly to the problem of the typological distinction between LM IB pottery and LM II pottery. It is said that excavation alongside the Royal Road at Knossos has vindicated the distinction between LM IB and LM II, but scholars differ in opinion concerning the dating of the recently found Ephyraean goblet with Type C argonaut motif from the Unexplored Mansion at Knossos (Pl. 6-4). This example would seem to show that the distinction between these two periods is not yet completely clear.

In examining the problem of what the new typological features of LM II pottery style are, it is appropriate first to examine the dating of the Type C marine motifs and the Alternating Style, both of which have been ascribed to the "late" stage of LM IB. The argument for this dating is based on the typological "intermediacy" between LM IB and LM II pottery of these pottery styles and that of the pottery found associated with them. The

---

\* A summary of the Japanese original.



argument, however, does not seem to be founded on firm ground. First of all, the concept of LM II is not defined at all, so that the "intermediacy" remains vague: the motif shown in figure 1-2 may well be admitted as intermediate between figure 1-1 and figure 1-3, but the latter is seen on the pottery (PM IV, 354, fig. 297a) classified by Furumark as LM IIIA:1. And where the notion of intermediacy as such is concerned, the question of what element makes a certain motif "intermediate" is not always easy. Where the Type C marine motifs are concerned, it admittedly seems true that the appearance of the motifs must have been later than that of the Type A and Type B marine motifs, yet it is very questionable whether such degenerate and diminutive motifs should be placed between the LM IB Type A and Type B marine motifs and the LM II marine motifs: the gradual development of the marine motifs from LM IB to LM II is, as shown below, quite well traceable without considering Type C marine motifs.

Among the marine motifs, the octopus motif, having a rather complex structure, can be analyzed in comparative detail. If one examines the tentacles of the LM IB "naturalistic" octopus motif, which at first sight, seem to be drawn intertwining at random, one finds that they seem to be drawn in accordance with a certain pattern. If one examines the manner of drawing the octopus tentacles on LM IB Marine Style pottery and LM II pottery with the octopus motif, and studies carefully other parts of the motif and the surrounding subsidiary motifs, it seems possible to distinguish at least four styles of octopus motif which would seem to represent four successive phases. This chronological division will form a basis for our inquiry into LM II pottery.

The characteristic typological features of each of the four phases are as follows (the two parts of the octopus body separated at its narrow part are called "head" and "trunk" respectively. For the appellation of the tentacles, see fig. 4).

Phase I: The body is drawn vertically or diagonally, but always with the trunk upward. The second and third tentacles cross at approximately the highest point of their first wave. The first tentacles enclose the space around the trunk, curling outward. The movement of the tentacles in relation to each other is comparatively free. Suckers enclosing a dot are attached to the outside of the tentacles. Many subsidiary motifs are used to fill the surrounding spaces. For examples, see Pl. 1.

Phase II: A horizontal posture of the body may appear at this phase. In general, the tentacles do not cross; if they cross, the cross is not observable at the second and third tentacles. In the case of the octopus motif on the three-handled

jar from *Prosymna* (Pl. 2-4), the cross is seen on the third and fourth tentacles, and the third tentacles might be considered as a prototype of the third tentacles of the octopus motif ascribed to Phase III (fig. 7-1). The movements of the tentacles are often weak and not independent; the first and second tentacles seem to tend to be drawn in pairs. The tentacles stretch parallel, enclosing narrow spaces. There seem to appear inward curving first tentacles which might be considered as a prototype of the first tentacles of the octopus motif ascribed to Phase III (fig. 7-1). The ends of the tentacles sometimes curve near the trunk of the octopus body; the close resemblance of the first tentacles curving near the trunk (Pl. 2-2) to that of the octopus motif ascribed to Phase IV (fig. 7-c) is remarkable (see also Pl. 2-1). The suckers mostly do not enclose a dot, and are not always attached to the outside of the tentacles. The spaces between the first tentacles and the body are sometimes free of any subsidiary motif. On the contrary, in some cases a bubble-like rock-work motif is found filling a large part of the spaces. Trefoil and quatrefoil rock-work motifs (fig. 5-c), which seem to be derived from a stylized rock-work motif (fig. 5-b) may appear at this phase. For examples, see Pl. 2; fig. 6.

Phase III: Stylized hook-shaped tentacles the ends of which curl outward may appear at this phase. Intensified symmetrical arrangement of the tentacles is found. When these typological features are combined in an octopus motif, it creates a very different impression from those already considered (fig. 7-a). Other conspicuous new typological features are: suckers represented by dots, fine lines coming out from the head and stretching between the tentacles, a tongue-shaped projection from the top of head. The number of tentacles seems to have become immaterial. Where the treatment of the spaces is concerned, two contrasting manners, the precursors of which may have already appeared, are to be found: either the spaces are entirely filled with the filling motif; or they are left completely vacant. For examples, see fig. 7-a, b; 8.

Phase IV: The octopus motif of this phase remains essentially the same as that of Phase III. Tentacles without suckers seem first to have appeared at phase III, but at this phase they seem to become common. Slender, string-like tentacles and eyes represented by concentric circles, both of which are characteristic features of the LM III period, seem to appear at this phase; consequently, it might not be impossible to postulate the appearance of the vertical, head

upward posture of the body which is generally considered an index of the octopus motif of the LM III period. For examples, see fig. 7-c; PM IV, 308, fig. 242; Popham 1970, Pl. 4d. (cf. also, PM IV, 309, fig. 244-a)

Furumark, together with Evans, has admitted the partial contemporaneity of LM IB and LM II, and in his terminology LM IB late and LM IIA mean, chronologically, the same thing. If one considers this point in relation to the typological-chronological distinction above outlined, one will notice that the octopus motifs which he ascribed to LM IB late are those of Phase I and Phase II, and those which he ascribed to LM IIA are those of Phase III. There seems to be no possibility of interpreting this typological distinction as regional, which means that Furumark's LM IIA can be treated as a chronologically distinct period. It will also be noticed that all pottery which Furumark assigned to LM IIA has the octopus motif. Then, what other pottery is there contemporaneous with his LM IIA pottery, in other words, the pottery of Phase III? To this question, one has to try a typological examination of LM IB pottery. From a close examination not only of the main motifs but also of the subsidiary motifs—the decoration bands on the neck and shoulder of the pottery seem particularly significant—as well as of the composition of the motifs (text pp. 182-196), the Alternating Style, the Type C marine motifs, and the so called "surface pattern", for example in the form of the Zig-Zag motif or the running spiral with arcade pattern, together with the Ephyraean goblet, seem to be ascribable to Phase III. Moreover, some of the Marine Style pottery, though apparently similar to that of Phase II as far as the main motifs also are concerned, also seems to be ascribable to this phase (see Pls. 4 and 5, especially 5-3; see fig. 10, especially -c). One is reminded in this connection that Warren has maintained the contemporaneity of the Alternating Style with other LM IB pottery.

If such pottery of Phase III were called LM IB as before, it would involve the difficult problem of by what index LM II is defined, since the Palace Style three-handled jar and the Ephyraean goblet had probably already appeared before Phase IV. In addition, as seen above, LM IIIA:1 pottery might well appear in Phase IV; even between the pottery of Phase III and that of the LM IIIA:1 period, a close typological proximity suggesting a direct chronological relationship can be recognized; the globular three-handled ewer from Isopata Tomb 2 (Evans 1913, 47, fig. 62) dated by Furumark to LM IIIA:1 may be seen as a direct derivation from the Alternating Style. If, bearing in mind these remarks, one retains Furumark's chronological framework, it would seem reasonable to define the LM II period as Phase III.

Recently, Popham ascribed an Ephyraean goblet with Type C argonaut motif (Pl. 6-4)

to LM II. Mountjoy, on the other hand, considered it to belong to a late stage of LM IB. Since this goblet is ascribed to Phase III, Popham's dating accords with ours in its result; however, the result of his dating seems to be more far-reaching than he may suppose, in that the pottery of Phase III has inevitably to be ascribed to LM II. It is interesting here to examine a four-handled jar found among the destruction debris at Royal Road at Knossos (a jug ascribable to Phase III [Hood 1971, Pl. 13] was found among the same debris). The octopus motif painted on the jar is admittedly Type A. (Pl. 6-3. also cf. Hood 1962, 28, fig. 36), but its radiating and very weakly waving, stiff tentacles; the suckers attached clockwise to the tentacles, which are also seen in the Type C octopus motif (cf. fig. 3-a); and the extreme constriction of the body, which recalls the LM III octopus motif, are very characteristic. These typological features are not found in the octopus motif of Phase II, and, above all, the resemblance of the whorl shell motif and Y-shaped or cruciform rock-work motifs on this jar with those on the goblet with type C argonaut motif is so conspicuous that the same hand might be suspected. The special shape of these rock-work motifs, which is not found, as far as the present writer knows, on the Marine Style pottery of Phase II, can be described as an "inside-out" form of the trefoil or quatrefoil rock-work motifs of Phase II, from which it is probably derived. All this suggests that, although apparently typical of the LM IB Marine Style, it seems this jar should be ascribed to Phase III. Thus it does not seem to accord with reality to postulate, attaching too much importance to the shape of the suckers, only one line of development for the marine motifs.

If our understanding of this aspect of pottery in Phase III is correct, the argument of Coldstream that Kastri in Kythera was abandoned about a generation after the mid-LM IB disasters on Crete would seem to need reconsideration. His argument is based on accounts of the large quantity of Alternating Style pottery at Kastri. Coldstream, advocating the theory of a natural cause (Theran eruption) of the LM IB destruction on Crete, poses a question to those who ascribe the destruction to the Mycenaeans: "why did they meanwhile tolerate a flourishing Cretan community so close to their own shores (Coldstream 1978, 398)?" It is, however, easy to point to pottery of Phase III, including pottery in the Alternating Style—it is questionable at this moment whether one can distinguish earlier and later styles within the Alternating Style—at many sites all over Crete.

In conclusion, it would seem to be difficult to subscribe to Coldstream's argument; on the contrary, within the period—whatever one may call it, whether LM IB or LM II (for the reasons mentioned above the present writer would prefer the latter)—in which, according to Coldstream, Cretan commerce was flourishing, and to which the Ephyraean goblet

ミノス後期Ⅱ期の問題

with Type C argonaut motif is ascribed, there would seem to have occurred very widespread abandonments and destruction at many sites, including Kastri in Kythera, Haghia Irini in Kea, and Khania and Knossos in Crete.

图 版 出 典 (Sources of Plates)

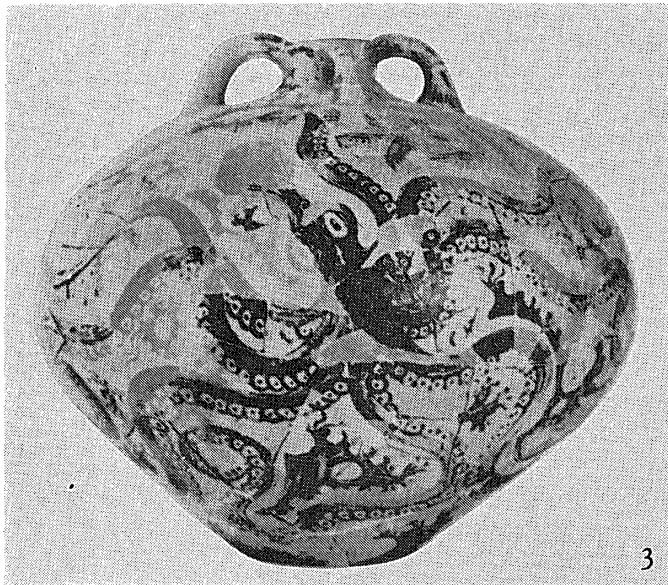
- 图版 1—1 S. Marinatos and M. Hirmer, (1960), Pl. 87.  
—2 S. Hood, (1978 b), p. 37, fig. 15A.  
—3 N. Platon, (1971), p. 121.  
—4 P. P. Betancourt, (1977), p. 42
- 图版 2—1 M. Popham and L. H. Sackett, (1970), Pl. 56 a  
—2 P. -A. Mountjoy, (1977), 557, fig. 1.  
—3 P. -A. Mountjoy, et al., (1978), Pl. 19b  
—4 P. P. Betancourt, (1977), p. 43.
- 图版 3—1 H. -G. Buchholz and V. Karageorghis, (1973), p. 312, 912b.  
—2 J. V. Luce, (1969), p. 32.  
—3 H. -G. Buchholz and V. Karageorghis, (1973), p. 308, 900.  
—4 S. Marinatos and M. Hirmer, (1960), 85.
- 图版 4—1 P. -A. Mountjoy, (1972), Pl. 37b.  
—2 P. -A. Mountjoy, et al. (1978), Pl. 20d.  
—3 N. Platon, (1971), p. 106  
—4 F. Schachermeyr, (1976), Pl. 8b.
- 图版 5—1 S. Marinatos and M. Hirmer, (1960) Pl. 86 right.  
—2 P. -A. Mountjoy, (1977), p. 559, fig. 3.  
—3 N. Platon, (1971), p. 110.  
—4 P. P. Betancourt, (1977), p. 40.  
—5 Décoration Egéenne, Pl. 20.  
—6 ibid.
- 图版 6—1 S. Marinatos and M. Hirmer, (1960), Pl. 82 left.  
—2 ibid, Pl. 83 above.  
—3 G. Daux, (1962), p. 895, fig. 13.  
—4 M. Popham, (1978), Pl. 24a.



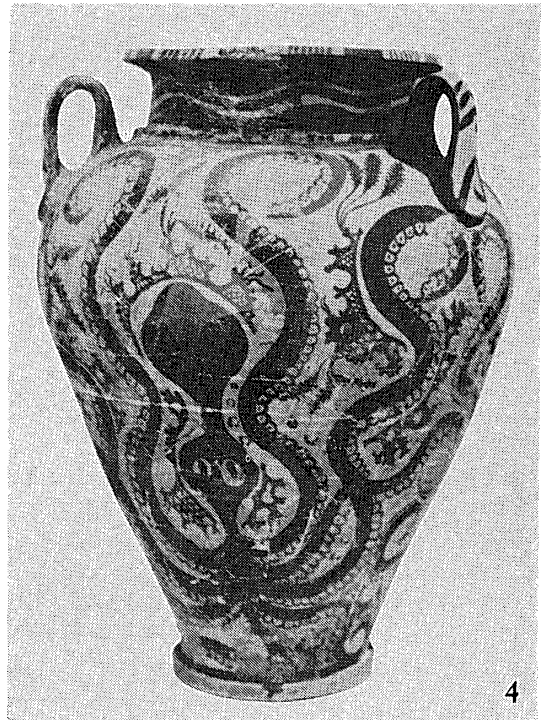
1  
Palaikastro 出土フラスコ型壺



2  
Gournia 出土鏡壺



3  
Zakros 宮殿祠堂出土鏡壺

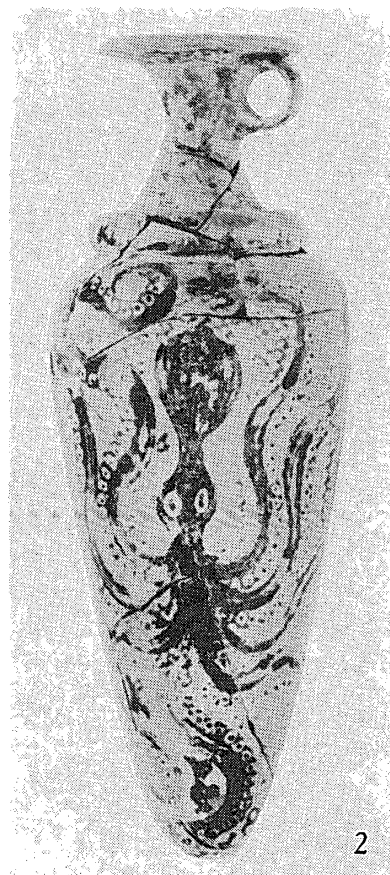


4  
Knossos 宮殿南正面出土三把手付壺

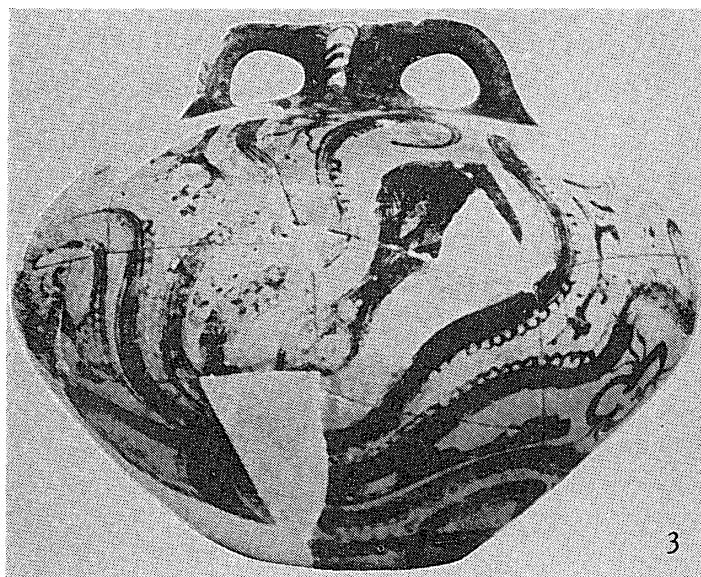
第一段階の蛸文付土器



Palaikastro 出土鏡壺：NP34



Palaikastro 出土リュトン：C3392



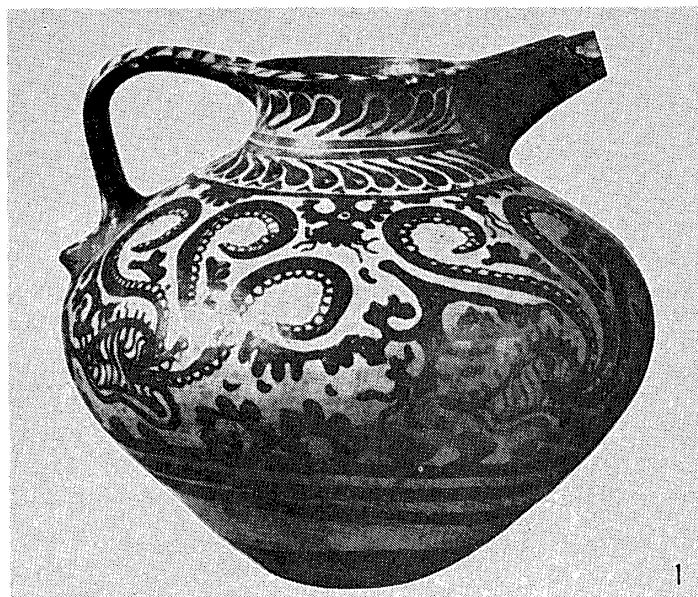
アイギナ島出土鏡壺：Aegina40



Prosymna 出土三把手付壺

第二段階の蛸文付土器

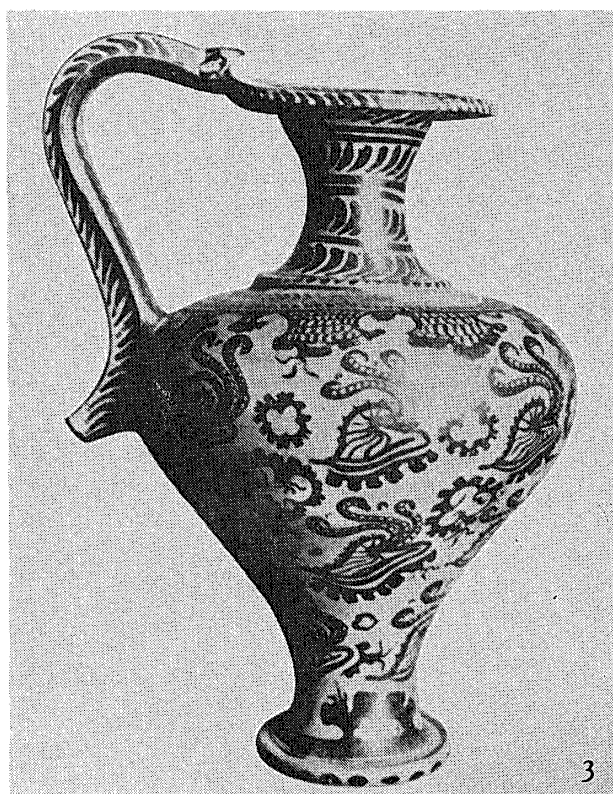




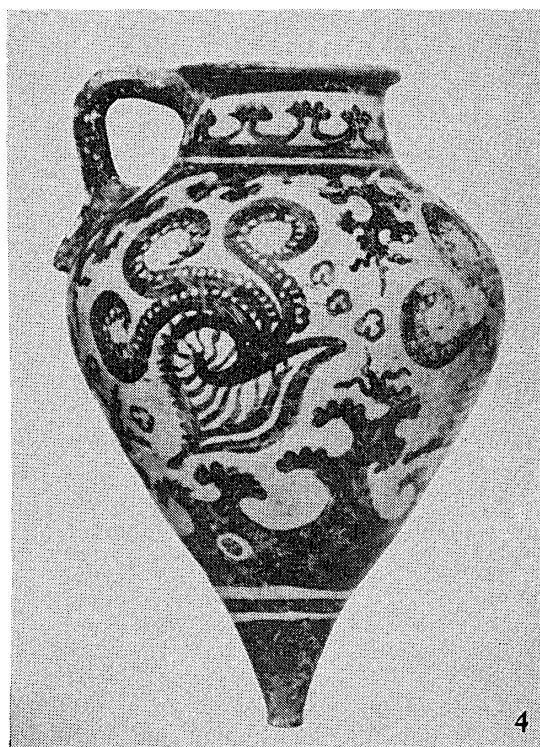
Abbot jug



Hagia Irini 出土アラバストロン

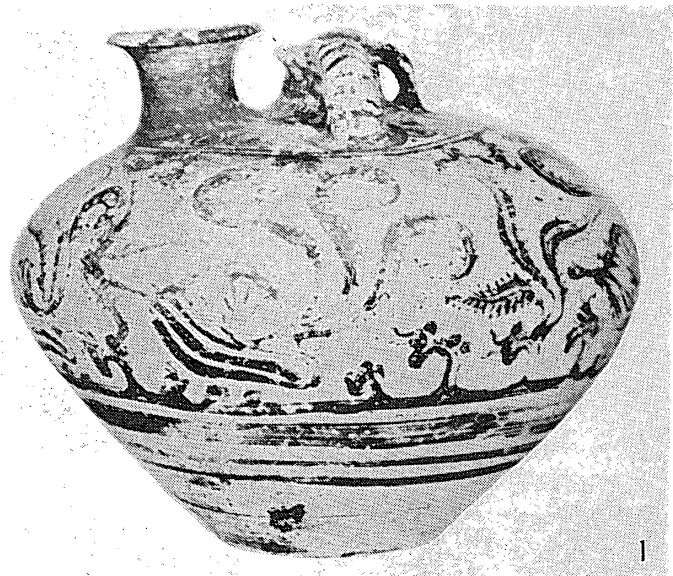


Marseille ewer



Phaestos 出土リュトン

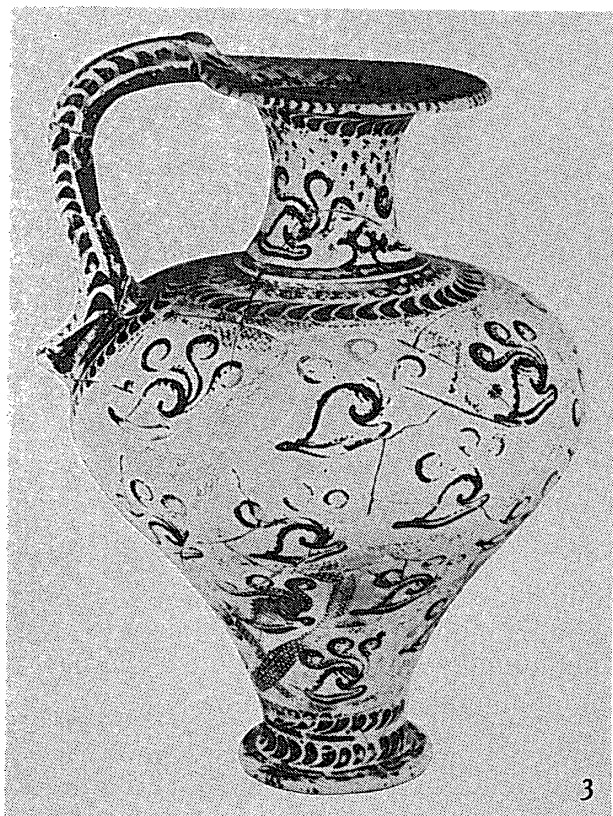
蝸文第二段階相当カイダコ文付土器



Basel 考古博物館所蔵鏡壺



Phylakopi 出土アラバストロン

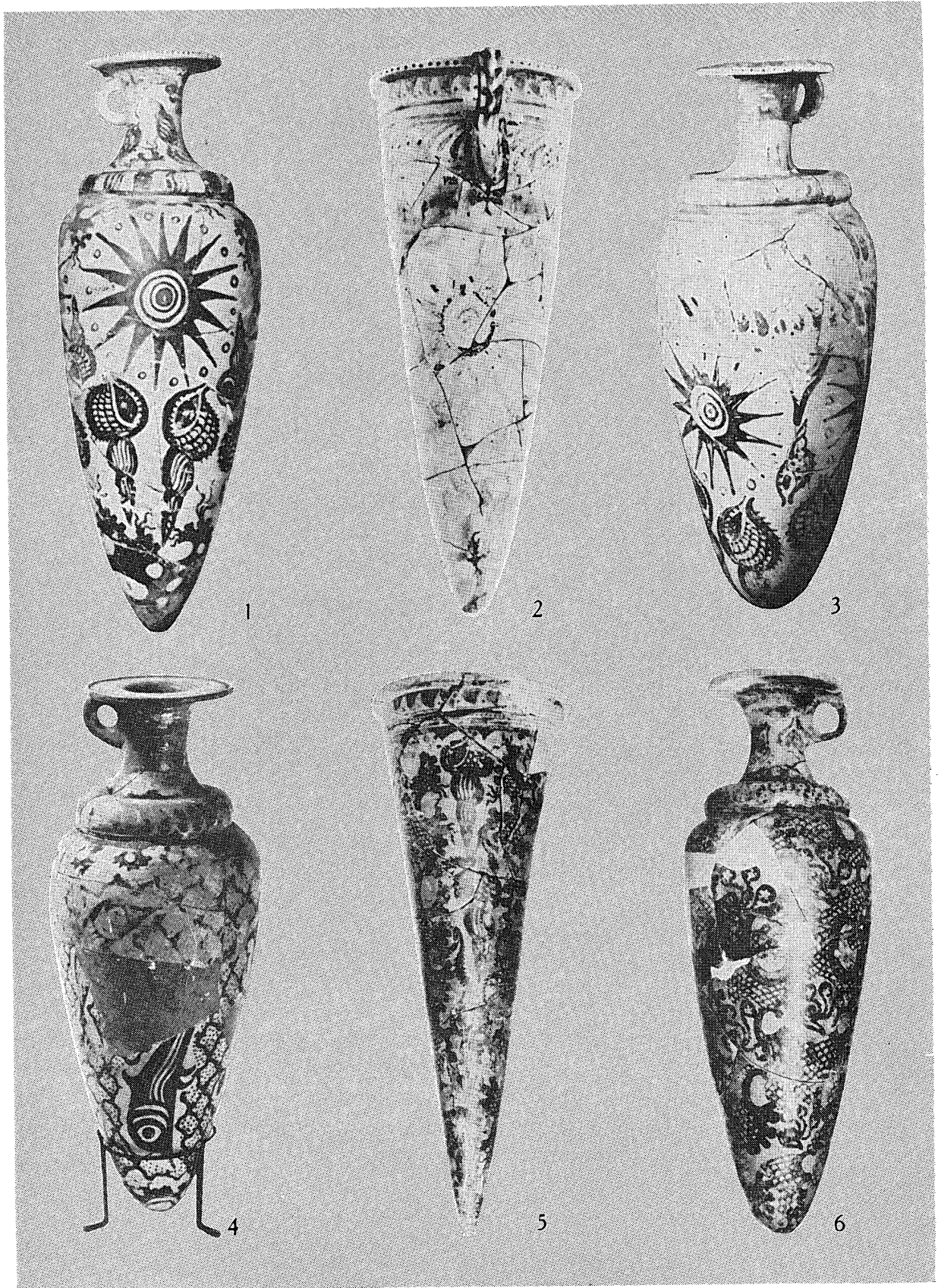


Zakros 官殿出土水差

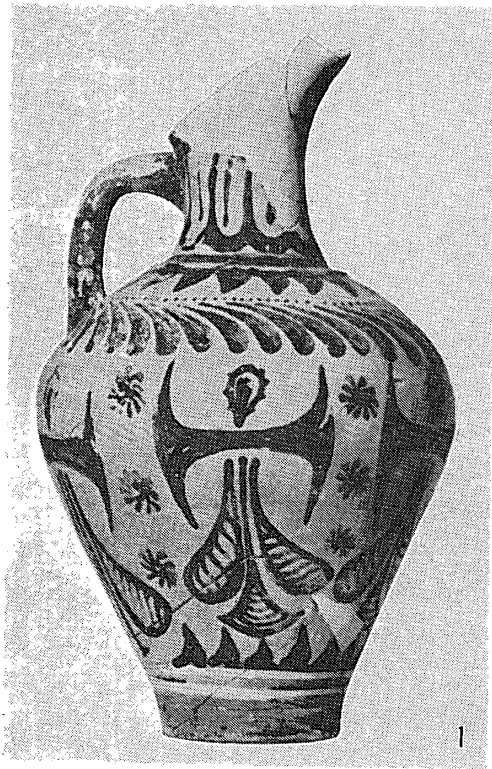


Hagia Irini 出土水差

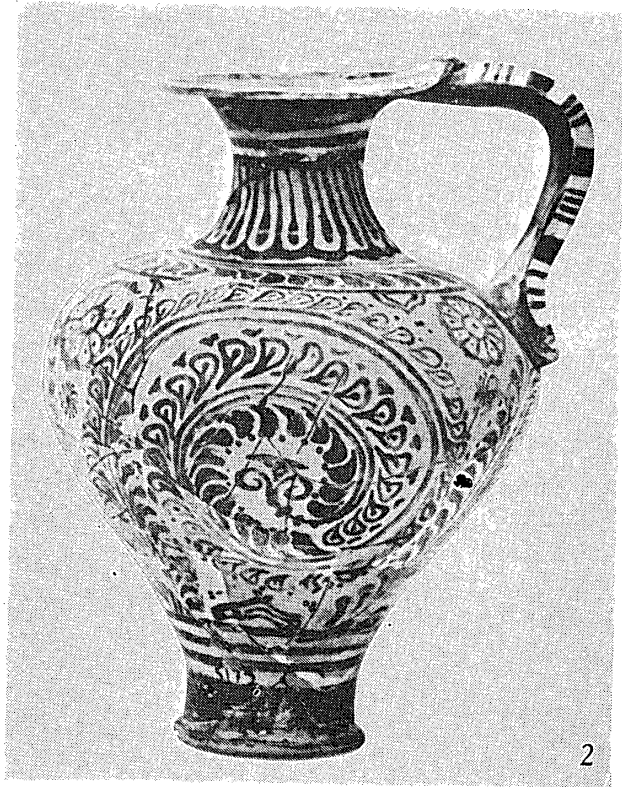
蛸文第三段階相当カイダコ文付土器



蛸文第三段階相当(1:?)のリュトン



Hagia Triada 出土水差



Palaikastro 出土水差



Knossos 出土蝮文付四把手壺



Knossos 出土エピュラ式杯

蝮文第三段階相当の土器